

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Island Orientation and the Perception of Sea Areas in Satawal (Central Caroline Islands)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋道, 智彌 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004415

サタワル島における伝統的航海術の研究

——島嶼間の方位関係と海域名称——

秋 道 智 彌*

Island Orientation and the Perception of Sea Areas
in Satawal (Central Caroline Islands)

Tomoya AKIMICHI

This paper describes two basic aspects of navigational knowledge employed by Satawalese sailors of the Central Caroline Islands, in Micronesia. *Woofanuw* denotes “to see the island,” and comprises a system of island orientation as observed from an island using 32 directional terminologies. *Woofanuw* is specific to each island, and my data cover the area extending from Yap, the westernmost island to Ponape, the easternmost. The sea areas drawn from these islands’ *woofanuw* system further include most of the Caroline Islands, the Marshall Islands to the east, the Mariana Islands to the north and even the Philippines, to the west.

Some directional errors emerge when a comparison is made with the actual compass bearing of the stars, and also directions on a marine chart. However, the Satawalese can compensate for these during navigation.

Individual differences of the *woofanuw* system demonstrate that even the most practical, and, *per se*, uniform knowledge is transmitted through different channels or schools of navigation.

Most islands and reefs involved in the *woofanuw* system exist, but sometimes mythical islands which evoke metaphor are included. Such esoteric islands are culturally significant in that navigators perceive them as their own activity areas.

* 国立民族学博物館第2研究部

I. 序論	1. 知識の広がり
1. ミクロネシアの航海術	1-1. 島・サンゴ礁・架空の島
2. 資料	1-2. 島の分布と <i>woofanuw</i>
2-1. <i>woofanuw</i> の知識	1-3. <i>woofanuw</i> と <i>yitimetaw</i> の知識の広がり
2-2. <i>yitimetaw</i> の知識	2. 知識の変異
3. 方法	2-1. <i>woofanuw</i> の知識の変異
II. 結果	2-2. 方位上のズレと航海
1. <i>woofanuw</i> と島嶼間関係	IV. おわりに
2. <i>yitimetaw</i> と島嶼間海域名称	
III. 考察	

I. 序論

1. ミクロネシアの航海術

ミクロネシアの中央カロリン諸島一帯では、大型の帆走アウトリガー・カヌーと独自の航海術に基づいた遠洋航海がおこなわれてきた [GLADWIN 1970; LEWIS 1975]。カロリン諸島の航海術においては、近代的航海術でもちいられる羅針盤、六分儀などの精密な測定器具、あるいは近代的な測量にもとづく海図などはいっさいもちいられてこなかった。しかし、だからといって実際の航海が何の指針も目安もなく、でたらめにおこなわれてきたわけではけっしてない。近代的な測定器具や海図にかわるべきものとして、星、波、太陽、風、潮流などの自然現象、魚や海鳥などの生物現象がたくみに利用され、しかも超自然的な観念に裏づけられた独自の技術・知識体系が発達してきた。

カロリン諸島の航海術において、基本的に重要とおもわれる知識がいくつかある。すでに筆者はサタワル島の事例から、そのうちのいくつかの知識項目について報告した [秋道 1981a: 617-641]。とくに、前掲論文でふれたように、15の相異なる星や星座の出没方位をもとにつくられたスター・コンパス (sidereal compass) は、近代航海術における羅針盤に相当するものであり、カロリン諸島における航海術のあらゆる知識にとって、原理的にも実際の航海においても重要なものである [GOODENOUGH 1953; LEWIS 1975; 秋道 1981a]。

このスター・コンパスの知識をもちいて、具体的な航海をおこなうときのことを考えてみよう。島嶼間の相対的位置関係や、目的とする島の方位関係は、航海をおこなううえで不可欠の情報となるのはいうまでもない。近代的な航海術においては、海図

(marine chart) によって島嶼間の相対的位置関係や地理的な位置関係をあらかじめ
しることができる。

ミクロネシアの航海術においては、紙に書かれたような海図がもちいられてきたわけ
ではなかったものの、マーシャル諸島では、伝統的航海術がもちいられていたことが
よく知られている [KRÄMER 1906; 松岡 1943: 66-101; 石森 1978]¹⁾。マーシ

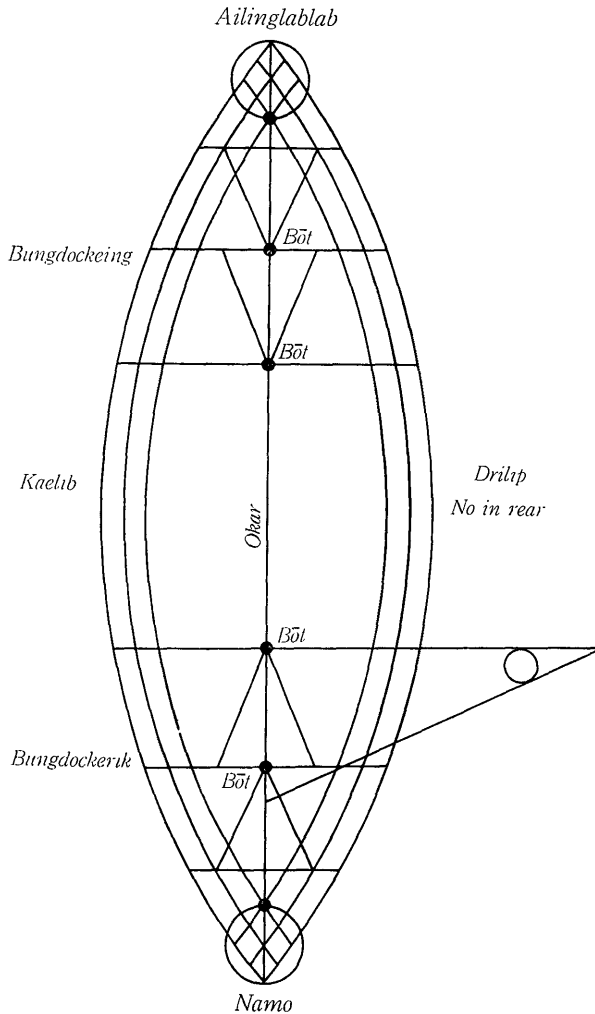


図1-1 マーシャル諸島のスティック・チャート (メドー)
[KRÄMER 1906] による。

1) マーシャル諸島の海図は1860年代、アメリカの宣教師ゲーリック (L. H. Gulick) によっては
じめて西欧社会に紹介された [松岡 1943: 67-68]。

シャル諸島の海図は、ココヤシの葉柄を数十本、組み合わせてつくったもので波やうねりをあらわし、小型のタカラガイや石で島やサンゴ礁の位置をしめたものである。細かいココヤシの葉柄できているところから、英語でスティック・チャート (stick chart) とよばれる。スティック・チャートには、3種類のものがあるが区別されており、このうちメドー (*meddo*)、レベリブ (*rebbilib*) とよばれるものは、島嶼間の地理的な位置関係を具体的にあらわしたものである [WINKLER 1901; KRÄMER 1906] (図 1-1, 1-2)²⁾。

これにたいして、カロリン諸島の航海術においても、島嶼間の相対的な位置関係や距離に関する知識が利用されてきた [LEWIS 1975]。ただし、1つの知識項目だけ

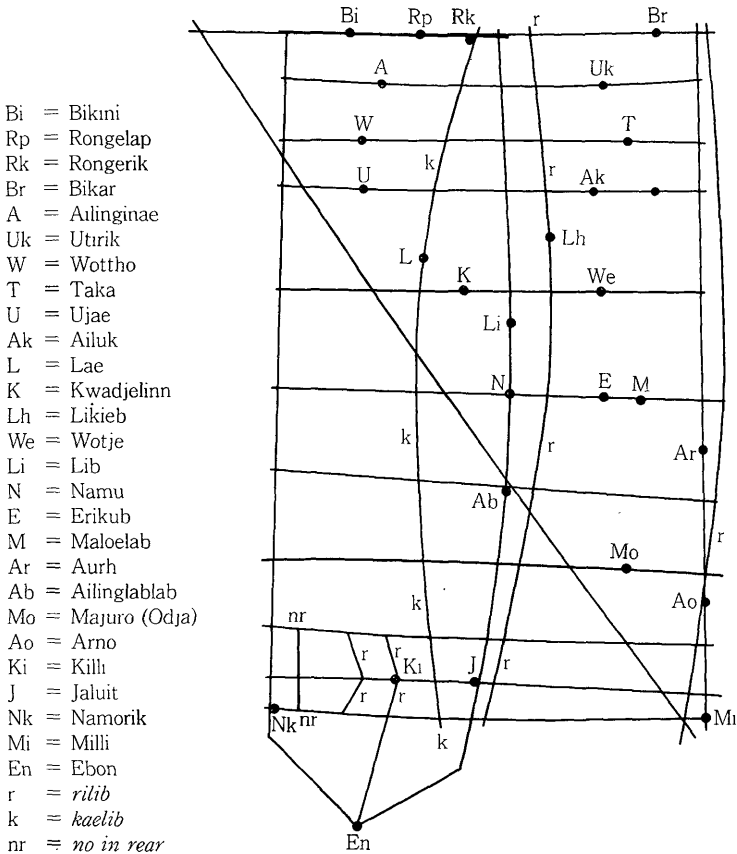


図 1-2 マーシャル諸島のスティック・チャート (レベリブ) [WINKLER 1901] による。

2) この海図の模型は、現在、筆者の所属する国立民族学博物館のオセアニア展示コーナーに常設展示されている [国立民族学博物館(編) 1981]。

で島嶼間の位置・方位・距離などがすべてわかるという仕組みにはなっておらず、いくつかの項目が相互規定的に利用され、はじめて全体像がわかるという内容になっている。

それらについては、今後、稿を重ねるなかで徐々にあきらかにしてゆくこととし、本論ではその手始めとして、島嶼間の位置関係に関する2つの知識項目をとりあげて考察をくわえてみたい。

2. 資 料

本論で考察の対象とするのは、*woofanuw* と *yitimetaw* とよばれる2つの知識である。

2-1. *woofanuw* の知識

woofanuw というのは、ある島からみて、別の島がどの位置にあるのかを、スター・コンパスの方位名称により列挙した知識である。*woofanuw* の *woo-* は、*wori-* すなわち「まっすぐかどうかをみる」ということばに由来している。*fanuw* は、「島」を一般にあらわす。この知識は、サタワル島で *woofanuw*、プルワト環礁で *wowfanu* [RISENBERG 1976: 99-100]、ウォレアイ環礁で *wofālu* [ALKIRE 1970: 45-47] とよばれ³⁾、既発表の論文 [秋道 1981a] であつかったスター・コンパス、アロウム (*yárhowumw*)、アマス (*yamas*) の項目について基本的に重要とされているものである。

1つの島と他の島じまとの方位関係は、平面上で考えた場合、島と島とを直線でむすんだ場合の針路 (course) によって決定される。その場合の針路は、スター・コンパスによる32の方位名称によりあらわされる (表1)。

たとえば、サタワル島からみてトラック諸島は、*táan máyinaḅ* の方向 (*máyinaḅ*, すなわち、わし座アルファ星の出現方位) に、プルワト環礁は、*táan páyiyefáng* (*páyiyefáng*, すなわち、わし座ガンマー星の出現方位) に、ラモトレック環礁は、*tupwun páyiyefáng* の方位 (わし座ガンマー星の没入方位) にそれぞれ位置するとうようにあらわされる。このように、スター・コンパス上の32の方位名称にしたがって、1つの島からみた周囲の島じまとの方位関係を順次、あげてゆくのが *woofanuw*

3) 戦前にも、カロリン諸島では、ある島から別の島が位置する方位を特定の星や星座の出没方位に対応させる *woofanuw* の知識が、ヤップ諸島 [MÜLLER 1917: 289-295]、トラック諸島 [KRÄMER 1932: 301]、ラモトレック環礁 [KRÄMER 1937: 131] などにおける調査からあきらかにされていたが、本論におけるほど詳細、かつ体系的な情報の収集はおこなわれていない。この点は、Alkire や Risenberg についてもあてはまる。

表1 スター・コンパス上の方位名称とコンパス方位

方位番号	サタワル語名	コンパス方位
1	<i>fúsumwakút</i>	0°
2	<i>táán máyinápánef áng</i>	14°
3	<i>táán wéné</i>	27°
4	<i>táán yúkúniik</i>	33°
5	<i>táán méén</i>	51°
6	<i>táán mwáárikár</i>	65°
7	<i>táán wuun</i>	73°
8	<i>táán páyiyef áng</i>	79°
9	<i>táán máyináp</i>	81°
10	<i>táán páyiyéér</i>	83°
11	<i>táán yéniyén</i>	91°
12	<i>táái sárepwén</i>	98°
13	<i>táái tumwur</i>	117°
14	<i>táán mesarúw</i>	127°
15	<i>táánupw</i>	154°
16	<i>machimeyas</i>	166°
17	<i>wenewenenupw</i>	180°
18	<i>machimenetow</i>	193°
19	<i>tupwunupw</i>	206°
20	<i>tupwun mesarúw</i>	233°
21	<i>tupwui tumwur</i>	243°
22	<i>tupwui sárepwén</i>	252°
23	<i>tupwun yéniyén</i>	269°
24	<i>tupwun páyiyéér</i>	276°
25	<i>tupwun máyináp</i>	279°
26	<i>tupwun páyiyef áng</i>	281°
27	<i>tupwun wuun</i>	287°
28	<i>tupwun mwáárikár</i>	294°
29	<i>tupwun méén</i>	309°
30	<i>tupwun yúkúniik</i>	327°
31	<i>tupwun wéné</i>	333°
32	<i>tupwun máyinápánef áng</i>	346°

である。

ある島と、その周囲にある島じまとの方位関係は、それぞれ1対1に対応するものである。それと同時に、1つの島の *woofanuw* は、その島にのみ固有のものである。このことから、「サタワル島の *woofanuw*」、つまり、*woofanuai Satawal* とか、「トラック諸島の *woofanuw*」、*woofanuan Ruuk* のようによばれる。*Ruuk* はトラック諸島をあらわす。

2-2. *yitimetaw* の知識

yitimetaw の *yiti-* は「名前」、*metaw* は「海、外洋」をあらわすことばであり、この知識は、島と島との間に横たわる海の名称を網羅したものである。航海術の知識としては、基本的な部類に属するわけではなく、航海者のすべてが知っているような一般的知識でもない。

島をとりまく外海は、一般に *nómw*、または *metaw* とよばれる。*nómw* はもともと、「ラグーン：礁湖」という意味で、*metaw* よりも古い用法である。*nómw*、または *metaw* は、さらに図2に示めたように、4つの海域に区分するのが普通である。そのさい、東西南北をあらわす方位名称が海を区分するうえでもちいられる。ただし、東の海を *nómwuni yaas*、西の海を *nómwuni faan* と称することもある。*yaas* は「上」、*faan* は「下」をあらわす。

以上のべた一般的な名称とは別に、それぞれの島嶼間につけられた個別名称の体系が *yitimetaw* ということになる。

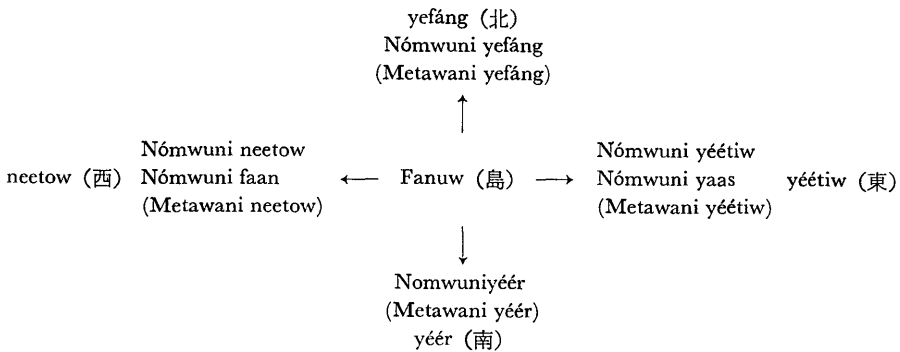


図2 島をとりまく海の名称

3. 方 法

スター・コンパスでもちいられる星・星座の出現方位（コンパス方位：度）は、神戸商船大学松木哲教授の御教示による計測値をもちいた（表1参照）。

島嶼間の距離をしらべるため、メルカトル図法による海図（縮尺は、150万分の1、200万分の1、400万分の1）をもちいた [U. S. HYDROGRAPHIC DEPARTMENT 1978a, 1978b; 海上保安庁水路部 1979, 1980a, 1980b]。

woofanuw に関する情報は、サタワル島在住の6名のインフォーマントよりえた。それらは、Ikirep氏（推定30歳代）、Ikegun氏（同50歳代）、Reppanganap氏（同50歳代）、Epemwai氏（同50歳代）、Ewiyong氏（同60歳代）、Magur氏（同60歳代）。

代)である。以下、本文中では、それぞれのインフォーマントを Ik, Ig, R, Ep, Ew, M のようにしてあらわす⁴⁾。年齢は調査当時のものである。

yitimetaw に関する情報は、Ep, R, Ew, Ig, Ik の5人よりえた。海の名称が人により異なることはないが、1人のインフォーマントがすべての情報をしていたわけではないので、結果はそれらを包括的にしめすこととする。

Ⅱ. 結 果

1. *woofanuw* と島嶼間関係

サタウル島の航海者たちは、サタウル島の *woofanuw* だけでなく、他の島における *woofanuw* に関する知識も知っている。筆者は島ごとに1つのセットとなった *woofanuw* の資料を、合計28の島についてあつめることができた。それらの島々の位置をしめしたのが図3である。図からもわかるように、このなかには、カロリン諸島のほとんどの島々がふくまれている(図3)。

以下、筆者のえた資料で、もっとも西に位置するヤップ島の *woofanuw* から、もっとも東に位置するポナペ島の *woofanuw* まで、順次、結果を記載する。

ある島から別の島の出現する方位名称は、表1にあらわした1から32の方位番号によってしめすものとする。また、実在することがわかっている島については、日本語とサタウル語で表記し、それに*印をつける。実在したとしても、その位置が確認できないサンゴ礁や架空の存在に関しては、サタウル語で表記する。そして、記載のなかで、必要に応じて説明をくわえるものとする。また、同じ島に関する情報でもインフォーマントによって、内容が異なることがある。この点を考慮してインフォーマントの区別をした。*woofanuw* における島嶼間の方位関係は、スター・コンパスの円周上にしめした(図4~31)⁵⁾。

4) なお、Ik氏は、沖縄で1975~76年に開催された沖縄国際海洋博覧会にサタウル島よりチュエメニ号で本部半島まで航海した経験をもつ。R氏の実弟はそのさいのキャプテンであった。その遠洋航海にもちいられたカヌーが国立民族学博物館に展示されていることも周知の事実である。

興味あることに、航海術の知識はもともと口頭で伝承されてきたものであるが、筆者が情報を収集したさいに、航海術の知識内容はあらかじめノートに記載されていた。高年齢のインフォーマントは日本統治時代に日本語教育をうけ、それより若い世代のものは戦後、英語による教育をうけているので、知識内容が日本語や英語の表記であらわされている。たとえば、*táan máyínáp* という方位名称は、「タンマイナブ」としてされている。

5) スター・コンパスを円形であらわしたが、矩形としてあらわす記載がこれまでの民族誌にみられる[KRÄMER 1932: 301; DAMM *et al.* 1938: 174; BURROWS and SPIRO 1957: 94; ALKIRE 1970: 45; LEWIS 1975: 67-68]。本論では、筆者のえた情報にもとづいて円形のスター・コンパスを採用する。

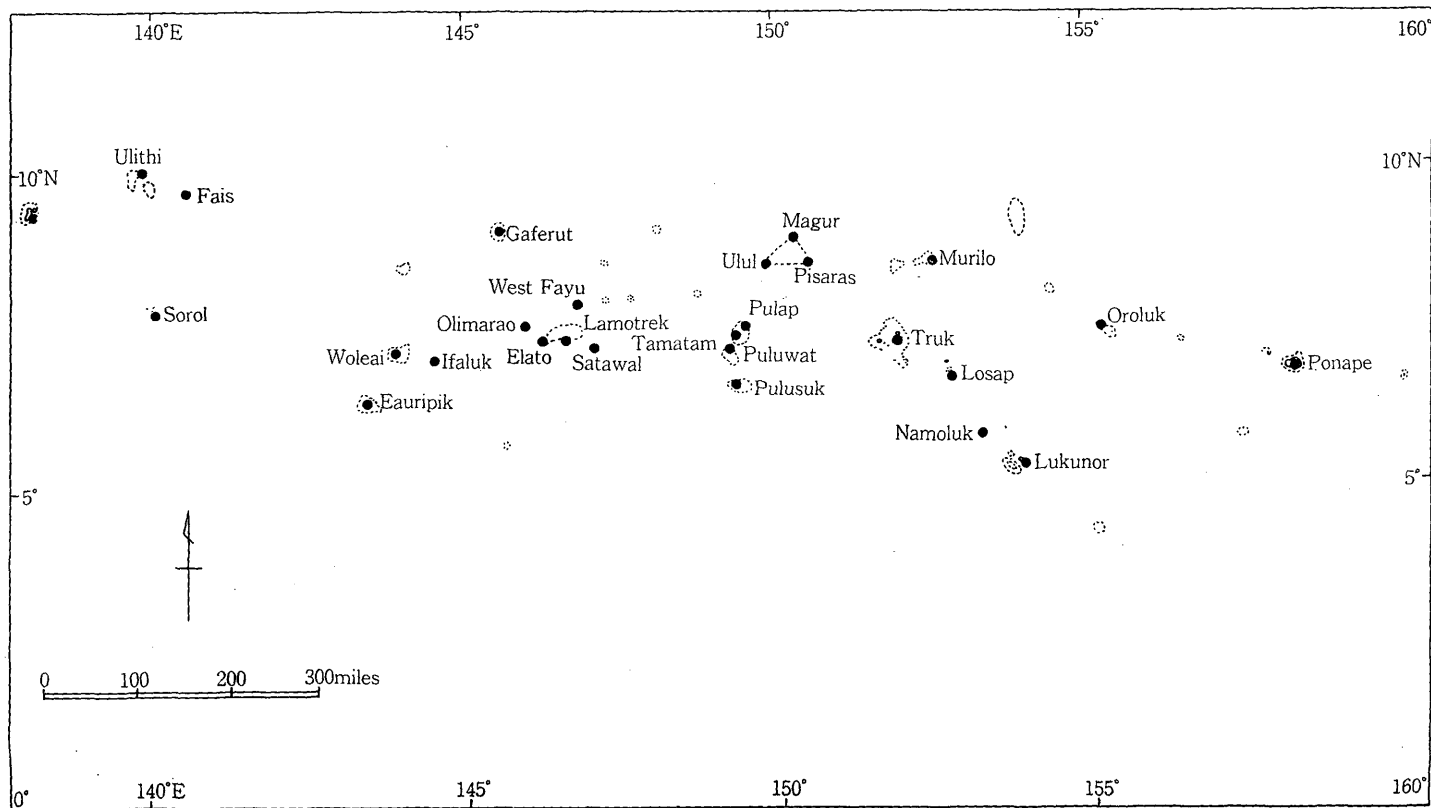


図3 ミクロネシアと *woofanuw* の資料とした島じま
●は、*woofanuw* の知識を記載した島

woofanuan Yaap (ヤップ島)

(図4) Ep

方位番号 島, リーフ, その他の現象

3 *Kafurhur* (架空の島)

サタワル島やプルフト環礁におけるプープ・ナパナブという航海術の知識のなかでも, *Kafurhur* が言及されている [RISENBERG 1976: 115; 秋道 1981b: 15-27]。

*Kuwaam** (グアム島)

Kuwaam は, 「カヌーの支柱 (= *yaamu*) に近づく」ということばに由来している [秋道 1981b: 15]。なお, グアム, サイパン, テニアン, ロタなどの島々は, 全体として *Marianis* とよばれる。

4 *Saipén* (サイパン島)

sai は, 「航海」, *pén* は「空の」という意味である。19世紀初頭, サタワル島の酋長アクルupp (*Yókurhupw*) らがマリアナ諸島方面に航海をおこなったさい, 当時, マリアナ諸島を統治していたスペインの政策により, サイパン島のチャモロ人は強制的にグアム島に移住させられていた。そのため, サイパン島には, 人がいなかった。島に上陸したところ, 無人であったことから, *Saipén* と名づけられたという。カロリン諸島民のサイパン

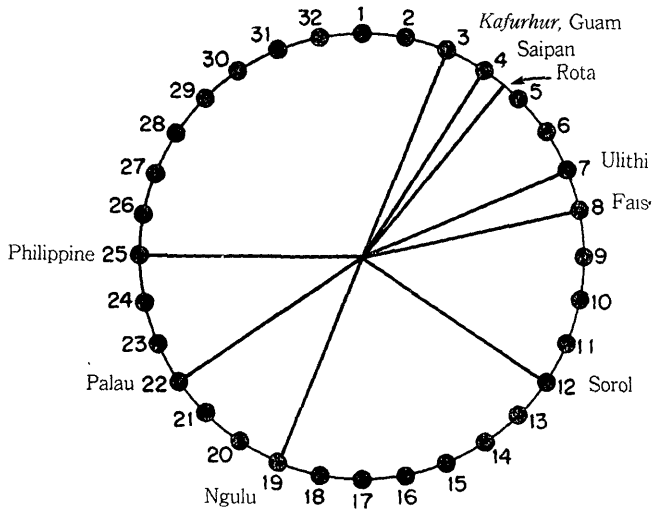


図4 ヤップ島の *woofanuw* と島嶼群の方位
Rota は, 方位番号4と5の中間に位置する。中間のことは, *neemach* とよぶ。

島の上陸地点は現在のガラパンであったという。サタワル島のインフォーマントによると、*yarapwang* は、ヒルガオ科の植物の名称で、海岸に泊まった場所に多く生育しており、この植物をもちいて仮小屋を作ったことから、そのように名づけられたという。

4+5/2 *Nuta** (ロタ島)

nuta は「遠くの方に」という意味で、同上の航海のさい、この島が遠方にみえたところから名づけられたという。

7 *Yunutiw** (ウルシー環礁)

8 *Fais** (フェイス島)

12 *Seróón** (ソロール環礁)

19 *Ngénuw** (ヌグール環礁)

22 *Pwanaw** (パラオ諸島)

とくにどの島をさすかはあきらかでないが、おそらくパラオ諸島最大のバベルダオブ島をさすものとおもわれる。

25 *Menina** (フィリピン)

Risenberg がブルフト環礁であつめたパラオ諸島の *wowfanu* には、アルデバランの没入方位に *Manina* (Philippines) が位置するとある [RISENBERG 1976: 100]。

woofanuan Yunutiw (ウルシー環礁)

(図5) Ep

11 *Fais** (フェイス島)

13 *Weneya** (ウォレアイ環礁)

14 *Yoorhupik** (ヨールピック環礁)

15 *Seróón** (ソロール環礁)

21 *Ngénuw** (ヌグール環礁)

23 *Yaap** (ヤップ島)

31 *Kafurhur* (架空の島)

woofanuan Yaap を参照のこと。

woofanuan Seróón (ソロール環礁)

(図6) Ep

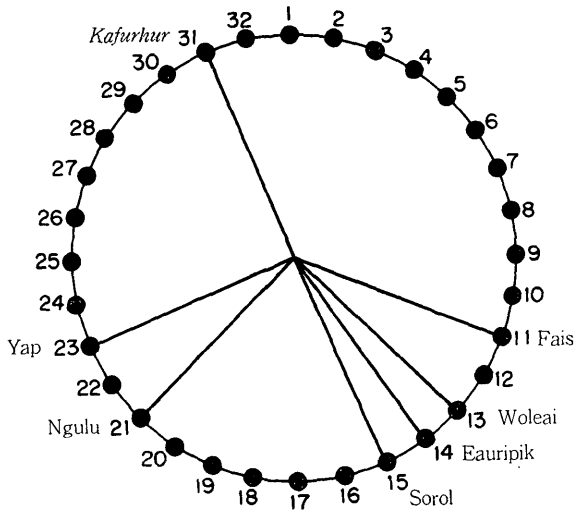


図5 ウルシー環礁の *woofanuw* と島嶼群の方位

- 2 *Fais** (フェイス島)
- 7 *Ferainap** (ファララップ環礁)
- 11 *Weneya** (ウォレアイ環礁)
- 12 *Yoorhupik** (ヨールピック環礁)
- 23 *Pwanaw** (パラオ諸島)

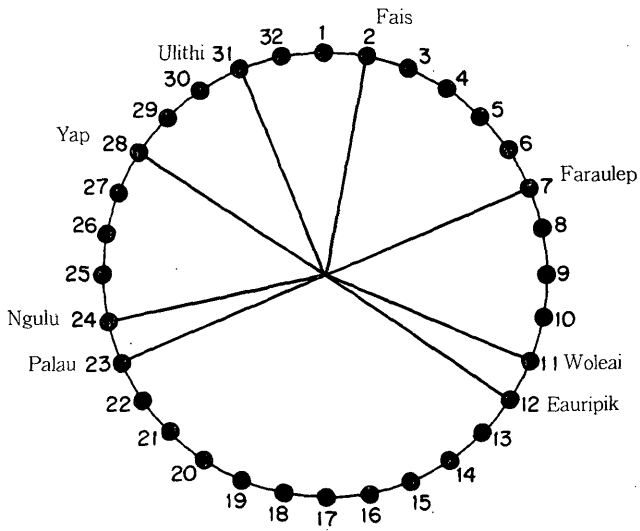


図6 ソロール環礁の *woofanuw* と島嶼群の方位

- 24 *Ngénuw** (ヌゲール環礁)
- 28 *Yaap** (ヤップ島)
- 31 *Yunutiw** (ウルシー環礁)

woofanuan Fais (フェイス島)

(図7) Ep

- 9 *Faiyew** (ガフェルト島)
架空の島 *Kafurhur* と混同しやすいが、これは実在する島である。
- 11 *Ferainap** (フェアラップ環礁)
- 13 *Weneya** (ウォレアイ環礁)
- 14 *Yoorhupik** (ヨールピック環礁)
- 18 *Seróón** (ソロール環礁)
- 22 *Ngénuw** (ヌゲール環礁)
- 25 *Yaap** (ヤップ島)
- 27 *Yunutiw* (ウルシー環礁)

woofanuan Yoorhupik (ヨールピック環礁)

(図8) Ep

- 4 *Ferainap** (フェアラップ環礁)

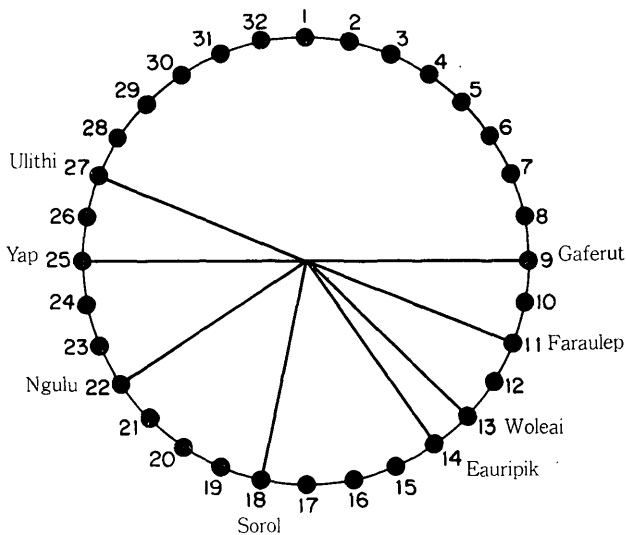


図7 フェイス島の *woofanuw* と島嶼群の方位

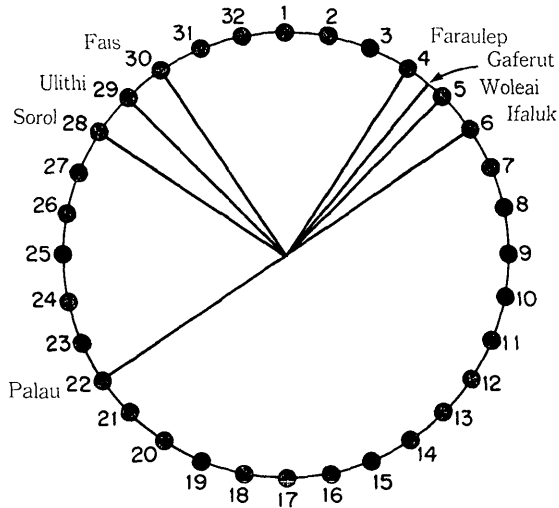


図8 ヨールピック環礁の *woofanuw* と島嶼群の方位
Gaferut は、方位番号 4 と 5 の中間に位置する。

- 4+5/2 *Faiyew** (ガフェルト島)
- 5 *Weneya** (ウォレアイ環礁)
- 6 *Yifénuk** (イファルク環礁)
- 22 *Pwanaw** (パラオ諸島)
- 28 *Seróón** (ソロール環礁)
- 29 *Yunutiw** (ウルシー環礁)
- 30 *Fais** (フェイス島)

***woofanuan Weneya* (ウォレアイ環礁)**

- (図9) Ep
- 3 *Ferainap** (ファララップ環礁)
 - 4 *Faiyew** (ガフェルト島)
 - 7 *Wenimerów** (オリマラオ環礁)
 - 9 *Yenóót** (エラート環礁)
 - 10 *Yifénuk** (イファルク環礁)
 - 21 *Yoorhupik** (ヨールピック環礁)
 - 27 *Seróón** (ソロール環礁)
 - 28 *Yunutiw** (ウルシー環礁)

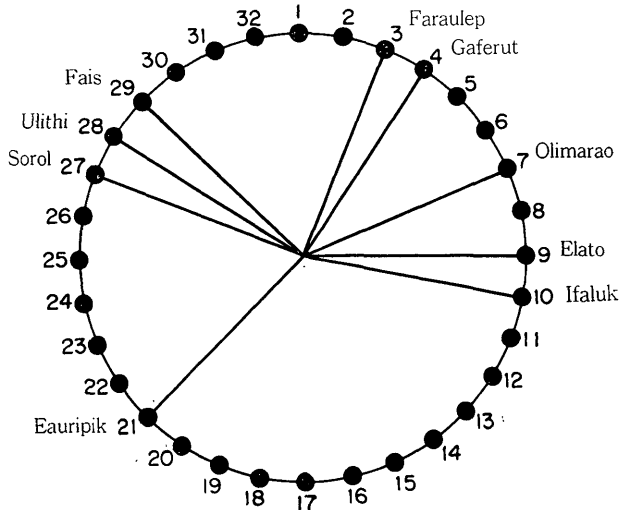


図9 ウォレアイ環礁の *woofanuw* と島嶼群の方位

29 *Fais** (フェイス島)

woofanuan Yifénuk (イファルク環礁)

(図10) Ep

- 1 *Ferainap** (ファララップ環礁)
 - 3 *Faiyew** (ガフェルト島)
 - 6 *Wenimerów** (オリマラオ環礁)
 - 8 *Yenóót** (エラート環礁)
 - 9 *Sowuk** (プルスク環礁)
 - 22 *Yoorhupik** (ヨールピック環礁)
 - 25 *Fenanus** (ウォレアイ環礁のファラリス島)
- [U. S. NAVAL OCEANOGRAPHIC OFFICE 1944]
- 26 *Rhayurh** (ウォレアイ環礁のラウル島)
 - 27 *Tékaiyanus* (リーフ)

ウォレアイ環礁の北にのびるリーフ。

Ew による情報では、1, 3, 6, 8 について Ep と同じだが、9 以下が異なる。

9 *Mesaineyanu* (水道)

ウォレアイ環礁の水路。

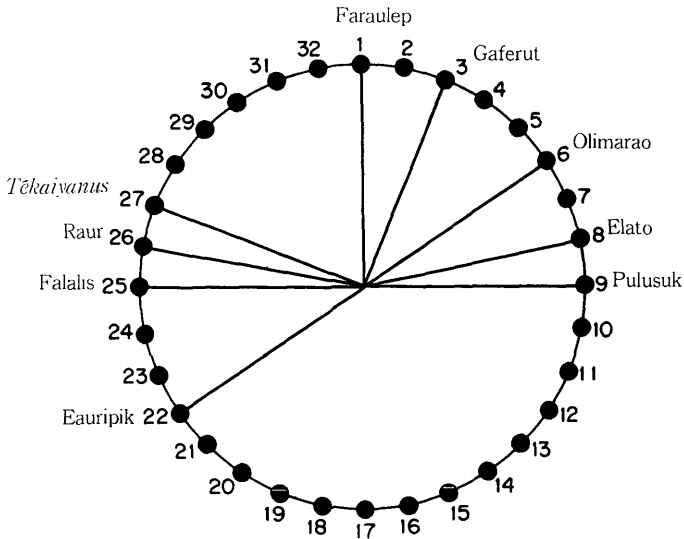


図10 イフェルク環礁の *woofanuw* と島嶼群の方位 (Ep の情報のみを記述)

27 *Weneya** (ウォレアイ環礁)

Ep のほうが Ew よりウォレアイ環礁の部分にくわしくわけていることがわかる。

woofanuan Faiyew (ガフェルト島)

(図11) Ew

- 1 *Kuwaam** (ゲアム島)
- 2 *Nuta** (ロタ島)
- 3 *Chiniyón** (テニアン島)

カロリン諸島民が19世紀、マリアナ諸島に航海したおり、この島をみつけたとき、太陽 (*yón*) が輝いていた (*tine*)。そうした状態を *wucheniyón* と称する。そのため、この島は *Chiniyón* と名づけられた。

- 4 *Saipén** (サイパン島)
- 5 *Tipipi* (架空の島)
- 6 *Tipap* (架空の島)
- 7 *Fanuan kuwen* (架空の島)

kuwen は「トカゲ」をあらわす。

- 9 *Makurh** (マグル環礁)

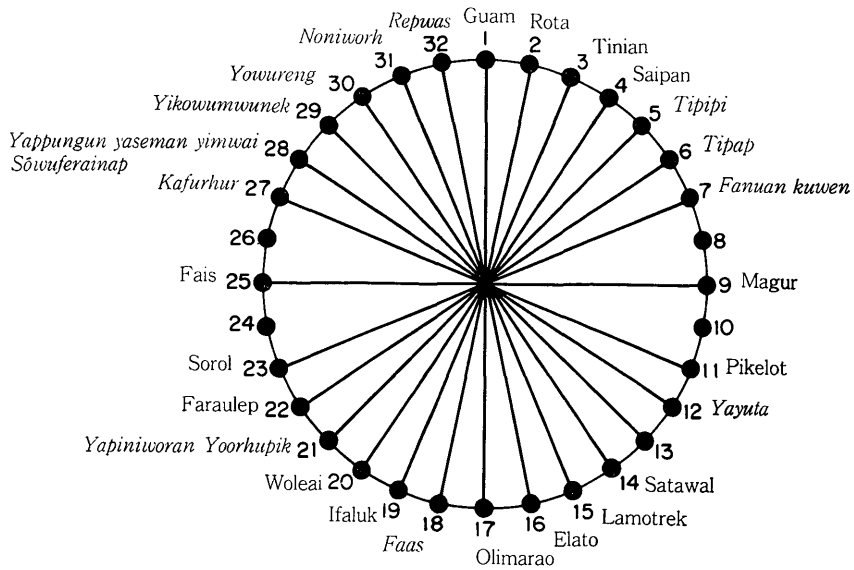


図11 ガフェルト島の *woofanu* と島嶼群の方位

- 11 *Piik** (ピケロット環礁)
- 12 *Yayuta* (海, あるいは海域)
サタワル島民が漁撈活動のため訪れる。
- 14 *Satawal** (サタワル島)
- 15 *Nómwéchok** (ラモトレック環礁)
- 16 *Yenóót** (エラート環礁)
- 17 *Wenimerów** (オリマラオ環礁)
- 18 *Faas* (リーフ)
波高い。*woofanuan Yifénuk* を参照。
- 19 *Yifénuk** (イファルク環礁)
- 20 *Weneya** (ウォレアイ環礁)
- 21 *Yapiniworan Yoorhupik* (リーフ)
ヨールピック環礁の北西端からのびているリーフで, *yapin-* は「後の」
woor は「リーフ」の意味である。
- 22 *Ferainap** (フェララップ環礁)
- 23 *Seróón** (ソロール環礁)
- 25 *Fais** (フェイス島)
- 27 *Kafurhur* (架空の島)

- 28 *Yappungun yaseman yimwai Sówuferainap* (魚)
 ことばの意味自体は、「フェララップ島の人の家の戸」である。じつは、
 1 匹のニシキヤッコという魚 (*rhiring: Pygoplites diacanthus*) をあらわす。
- 29 *Yikowumwunek* (魚)
 1 匹のアイゴ (*mek: Siganis sp.*)。
- 30 *Yowureng* (魚)
 1 匹のヒメジ (*woomey: Mulloidichthys flavolineatus*)。
- 31 *Noniworh* (クジラの群)
 褐色をしたクジラの群 (*cchon rááw*)。
- 32 *Repwas* (クジラ)
 1 匹のクジラで、背中が海面上にでており、腐っている。

woofanuan Wenimerów (オリマラオ環礁)

(図12) R

- 1 *Faiyew** (ガフェルト島)
 6 *Pikené** (ウエスト・フェーユ島)
 7 *Piik** (ピケロット環礁)
 9 *Ponowat** (プルワト環礁)

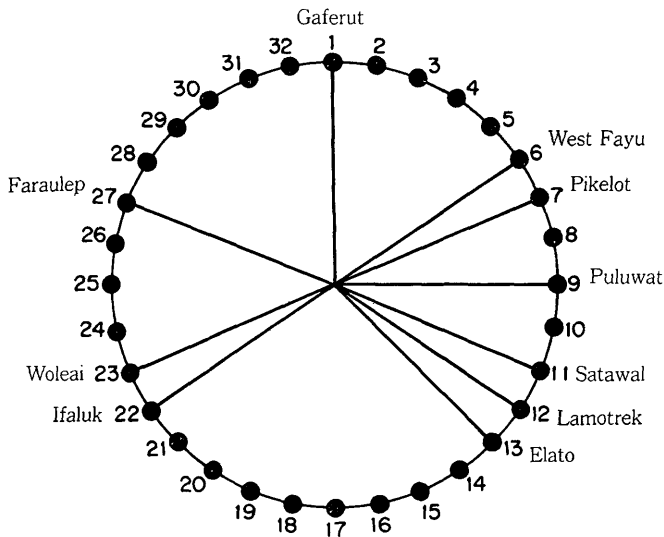


図12 オリマラオ環礁の *woofanuu* と島嶼群の方位

- 11 *Satawal** (サタワル島)
- 12 *Nómwéchok** (ラモトレック環礁)
- 13 *Yenóót** (エラート環礁)
- 22 *Yifénuk** (イフェルク環礁)
- 23 *Weneya** (ウォレアイ環礁)
- 27 *Ferainap** (ファララップ環礁)

woofanuan Yenóót (エラート環礁)

(図13) Ep

- 5 *Pikené** (ウエスト・ファーユ島)
- 6 *Piik** (ピケロット環礁)
- 11 *Nómwéchok** (ラモトレック環礁), *Satawal** (サタワル島)
- 24 *Yifénuk** (イフェルク環礁)
- 25 *Weneya** (ウォレアイ環礁)
- 29 *Wenimerów** (オリマラオ環礁), *Ferainap** (ファララップ環礁)
- 32 *Faiyew** (ガフェルト島)

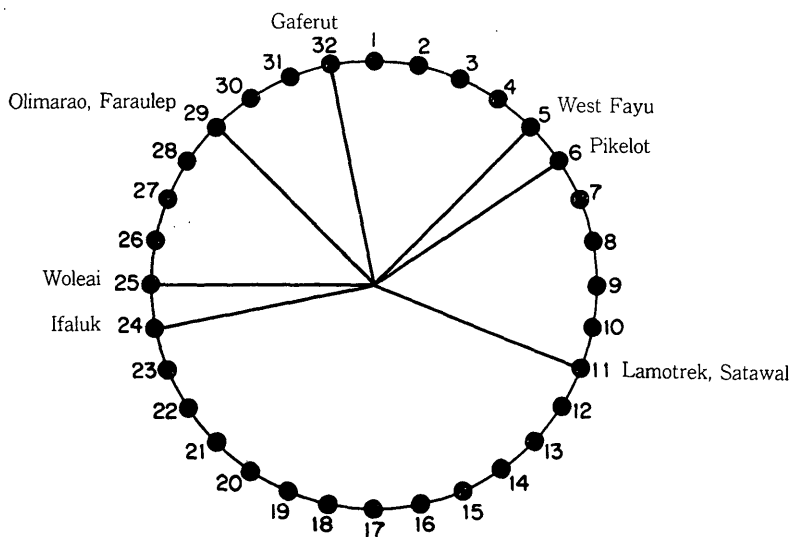


図13 エラート環礁の woofanuu と島嶼群の方位

woofanuan Nómwéchok (ラモトレック環礁)

(図14) Ep

- 4 *Pikené** (ウエスト・ファーフ島)
- 5 *Piik** (ピケロット環礁)
- 9 *Ponowat** (プルワト環礁)
- 10 *Satawal** (サタワル島)
- 26 *Yenóót** (エラート環礁)
- 28 *Wenimerów** (オリマラオ環礁)
- 31 *Faiyew** (ガフェルト島)

woofanuan Pikené (ウエスト・ファーフ島)

(図15) Ik

- 1 *Saipén** (サイパン島)
- 4 *Woranipwópw* (リーフ)
- 9 *Yayuta* (海)
- 14 *Satawal** (サタワル島)
- 17 *Wenikiy* (リーフ)

サタワル島南方の漁場でカツオやマグロがよくとれる。

- 19 *Nómwéchok** (ラモトレック環礁)

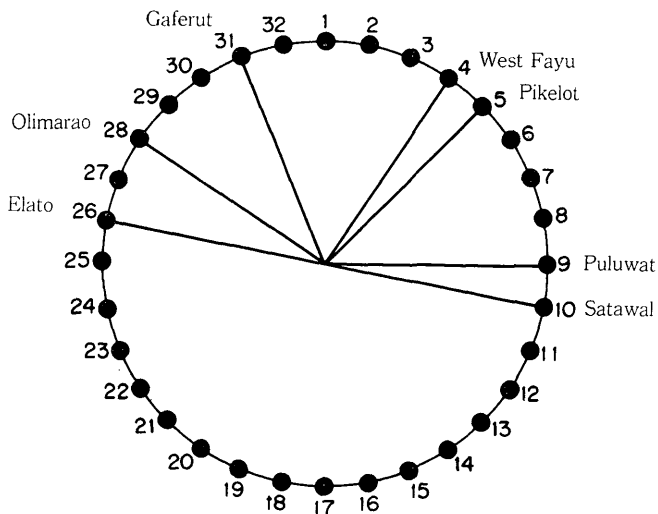


図14 ラモトレック環礁の woofanuw と島嶼群の方位

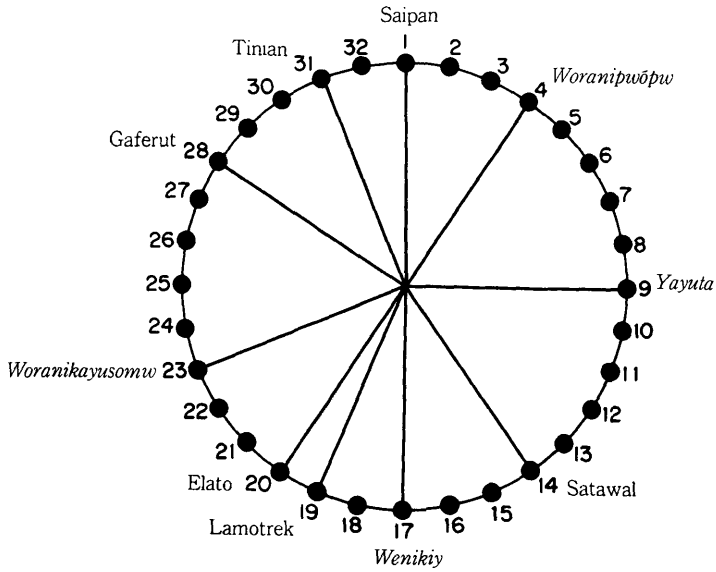


図15 ウェスト・フェーユ島の *woofanuu* と島嶼群の方位

- 20 *Yenóót** (エラート環礁)
- 23 *Woranikayusomw* (リーフ)
- 28 *Faiyew** (ガフェルト島)
- 31 *Chiniyón** (テニアン島)

woofanuai Satawal (サタワル島)

(図16) Ik

- 1 *Yayutai nemetaw* (海)
Yayuta と同じで、サタワル島民の利用する好漁場。
- 4 *Piik** (ピケロット環礁)
- 5 *Wonipik* (リーフ)
 サタワル島民の利用する好漁場。波はなく静かである (*yese nóónó*)。
- 6 *Wunuwun** (ウルル環礁)
- 7 *Punnap** (プンラップ環礁)
- 8 *Ponowat** (プルワト環礁)
- 9 *Ruuk** (トラック諸島)
 トラック諸島のなかでも、とくにモエン島をさす。

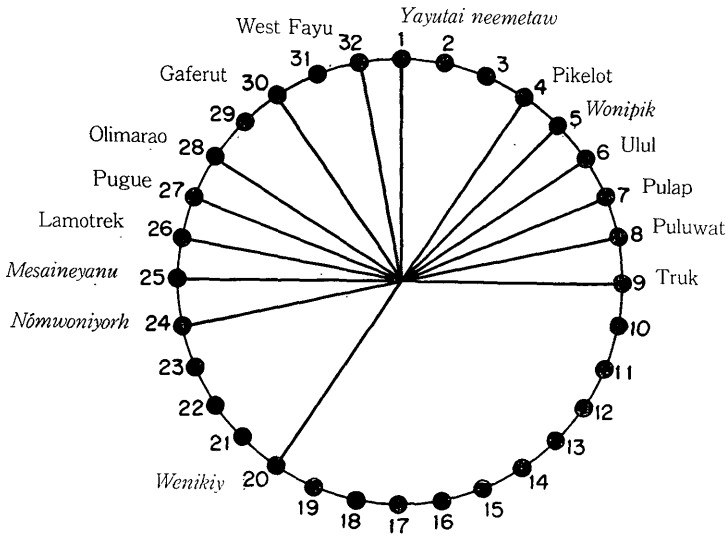


図16 サタワル島の *woofanuw* と島嶼群の方位

- 20 *Wenikiy* (リーフ)
woofanuan Pikené を参照。
- 24 *Nómwoniyorh** (ラモトレック環礁の島)
- 25 *Mesaineyanu* (水道)
woofanuan Yifénuk を参照。
- 26 *Nómwéchok** (ラモトレック環礁)
- 27 *Pwuwuk** (ブーク島)
ラモトレック環礁の Pugue 島。
- 28 *Wenimerów** (オリマラオ環礁)
- 30 *Faiyew** (ガフェルト島)
- 32 *Pikené** (ウエスト・ファーユ島)

woofanuan Piik (ピケロット環礁)

- (図17) Ik
- 1 *Woranimar* (リーフ)
 - 2 *Woranipwun* (リーフ)
 - 3 *Tifatun* (リーフ)
 - 4 *Nemayé* (リーフ)

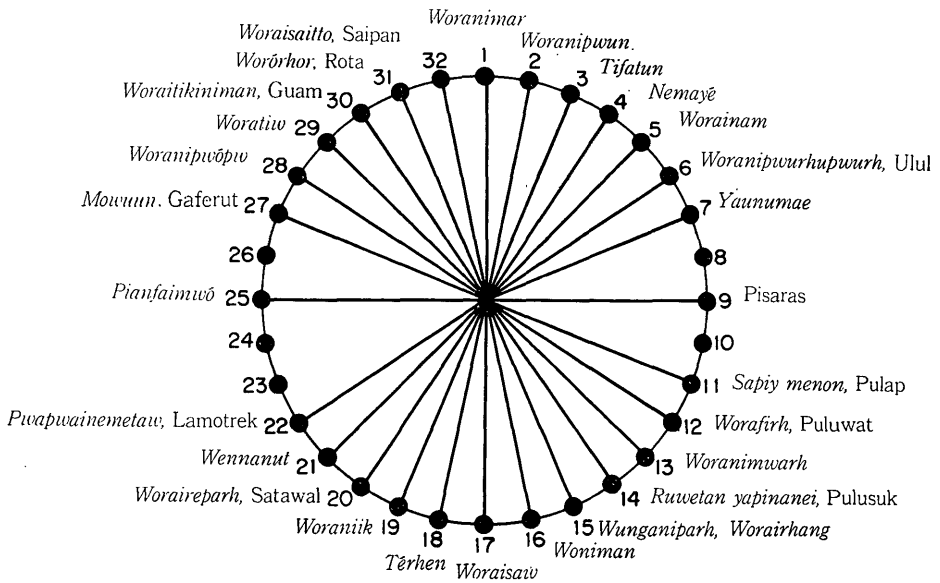


図17 ピケロット環礁の woofanuw と島嶼群の方位

- 5 *Worainam* (リーフ)
- 6 *Woraniḡwurhupwurh* (リーフ), *Wunowun** (ウルル島)
- 7 *Yaunumae* (不明)
- 9 *Pissaras** (ピセラル島)
- 11 *Sapiy menon* (リーフ), *Ponnap** (プンナップ環礁)
- 12 *Worafirh* (リーフ), *Ponowat** (プルワト環礁)
- 13 *Woranimwarh* (リーフ)
- 14 *Ruwetan yapinaneḡ* (リーフ), *Sowuk** (プルスク環礁)
- 15 *Wunganiparh* (リーフ), *Worairhang* (リーフ)
- 16 *Woniman* (リーフ)
- 17 *Woraisaw* (リーフ)
- 18 *Tērhen* (不明)
- 19 *Woraniik* (リーフ)
- 20 *Woraireparh* (リーフ), *Satawal** (サタワル島)
- 21 *Wennanut* (リーフ)
- 22 *Pwapwainemetau*, *Nómwéchok** (ラモトレック環礁)
- 25 *Pianfaimwō* (リーフ)

- 27 *Mowuun* (リーフ), *Faiyew** (ガフェルト島)
- 28 *Woranipwópw* (リーフ)
- 29 *Woratiw* (リーフ)
- 30 *Woraitikiniman*, *Kuwaam** (グアム島)
- 31 *Worórhoh* (リーフ), *Nuta** (ロタ島)
- 32 *Woraisaitto* (リーフ), *Saipén** (サイパン島)

woofanuan Ponowat (プルワト環礁)

(図18) Ik

- 4 *Wonowu** (オノ環礁)
- 5 *Pisirhar** (ピセラル島)
- 6 *Faiyew** (イースト・ファーフ島)
ガフェルト島は同じく *Faiyew* であるが, *Faiyewairhak*, この島は *Faiyewain* とよんで区別する。
- 7 *Wotong* (リーフ), *Piis** (ピース島)
トラック諸島の大環礁の北端にある島。
- 9 *Ruuk** (トラック諸島)
- 12 *Namwonuk** (ナモスク環礁)

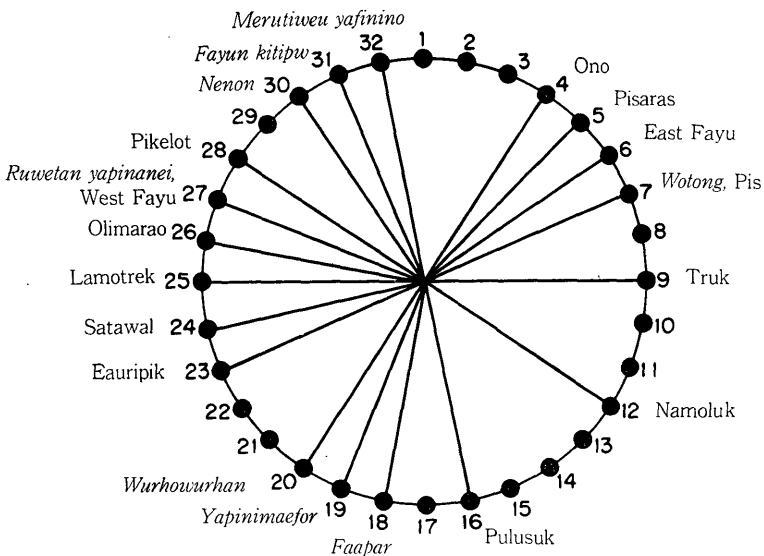


図18 プルワト環礁の woofanuw と島嶼群の方位

- 16 *Sowuk** (プルスク環礁)
- 18 *Faapar* (リーフ)
- 19 *Yapinimayefor* (リーフの切れ目で底のみえない深いところ)
- 20 *Wurhowurhan* (リーフ)
- 23 *Yoorhupik** (ヨールピック環礁)
- 24 *Satawal** (サタワル島)
- 25 *Nómwéchok** (ラモトレック環礁)
- 26 *Wenimerów** (オリマラオ環礁)
- 27 *Ruwetan yapinaneí* (リーフ), *Pikené** (ウエスト・フェーユ島)
- 28 *Piik** (ピケロット環礁)
- 30 *Nenon* (海域の名前)
- 31 *Fayun kitipw* (リーフ)
ルワト・リーフの東端
- 32 *Merutiweu yafinino* (リーフ)
ルワト・リーフの西端

woofanuui Sowuk (プルスク環礁)

(図19) Ew

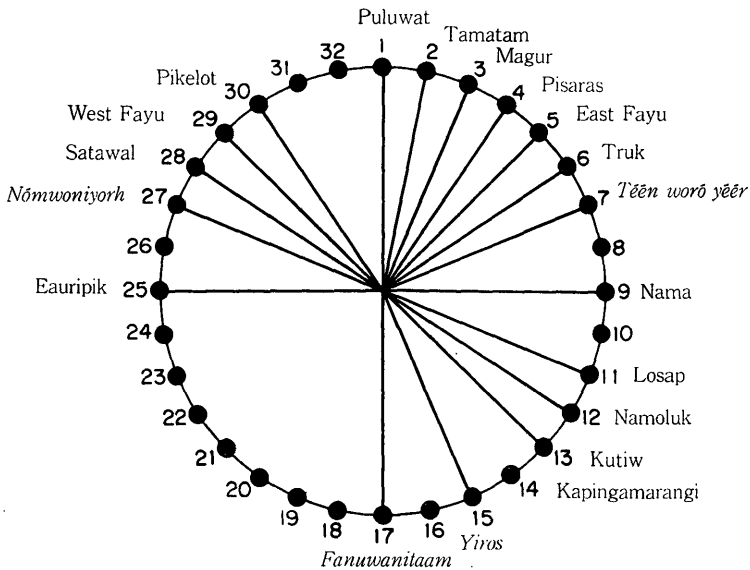


図19 プルスク環礁の woofanuui と島嶼群の方位

- 1 *Ponowat** (プルワト環礁)
- 2 *Tamatam** (タマタム島)
- 3 *Makurh** (マグル島)
- 4 *Pisirhar** (ピセラル島)
- 5 *Faiyew** (イースト・ファーユ島)
- 6 *Ruuk** (トラック諸島)
- 7 *Téén woró yéér* (リーフ)
- 9 *Némé** (ネマ島)
- 11 *Nésópw** (ロサップ環礁)
- 12 *Namwonuk** (ナモスク環礁)
- 13 *Kutiw** (クティウ島)
- 14 *Pikiram** (カピングマランギ環礁)
- 15 *Yiros* (架空の島)
 プルスク環礁の南には、リーフ以外に島はない。
- 17 *Fanuwaitaam* (架空の島)
 「カヌーの腕木の島」という意味で、海図上にはない架空の島である。
- 25 *Yoorhupik** (ヨールピック環礁)
- 27 *Nómwoniyorh* (海域)
- 28 *Satawal** (サタワル島)
- 29 *Pikené** (ウエスト・ファーユ島)
- 30 *Piik** (ピケロット環礁)

woofanuai Tamatam (タマタム島)

(図20) Ep

- 5 *Pisirhar** (ピセラル島)
- 6 *Faiyew** (イースト・ファーユ島)
- 7 *Nómwin** (ノムイン環礁)
- 9 *Yaraw** (コシャエ島)
- 14 *Kutiw** (クティウ島)
- 15 *Yettaan** (エタール環礁)
- 16 *Yiros* (架空の島)
- 18 *Sowuk** (プルスク環礁)

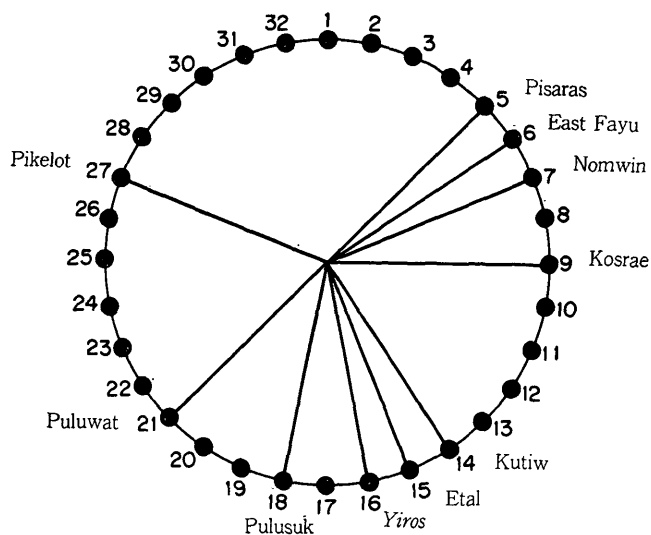


図20 タマトム環礁の *woofaniw* と島嶼群の方位

21 *Ponowat** (プルワト環礁)

27 *Piik** (ピケロット環礁)

woofanuan Punnap (ブンナップ環礁)

(図21) Ep

2 *Wunowun** (ウルル島)

3 *Yasiyes* (リーフ)

波が高い。

4 *Fainiyas* (リーフ)

波が高い。

5 *Pisirhar** (ピセラル島)

6 *Faiyew** (イースト・ファーユ島)

7 *Nómwin** (ノムイン環礁)

9 *Piis** (ピース島)

トラック大環礁の北端に位置する。

10 *Ruuk** (トラック諸島)

11 *Téén woró yéér* (リーフ)

13 *Namwonuk* (ナモヌク環礁)

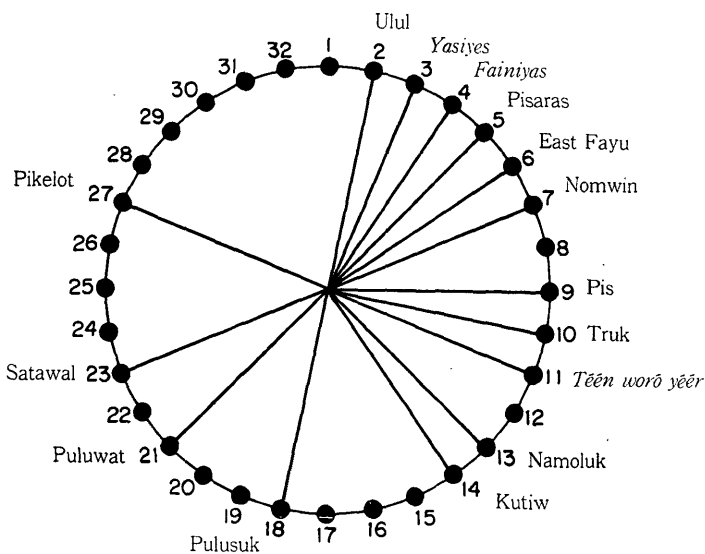


図21 プンナップ環礁の *woofanuu* と島嶼群の方位

- 14 *Kutiw** (クティウ島)
- 18 *Sowuk** (プルスク環礁)
- 21 *Ponowat** (プルワト環礁)
- 23 *Satawal** (サタワル島)
- 27 *Piik** (ピケロット環礁)

woofanuan Wunowun (ウルル島)

(図22) Ik

- 4 *Makurh** (マグル島)
- 8 *Pisirhar** (ピセラル島)
- 9 *Nómwin** (ノムイン環礁)
- 11 *Ruuk** (トラック諸島)
- 18 *Punnapp** (プンナップ環礁)
- 19 *Ponowat** (プルワト環礁)
- 22 *Satawal** (サタワル島)
- 23 *Nómwéchok** (ラモトレック環礁)
- 24 *Piik** (ピケロット環礁)

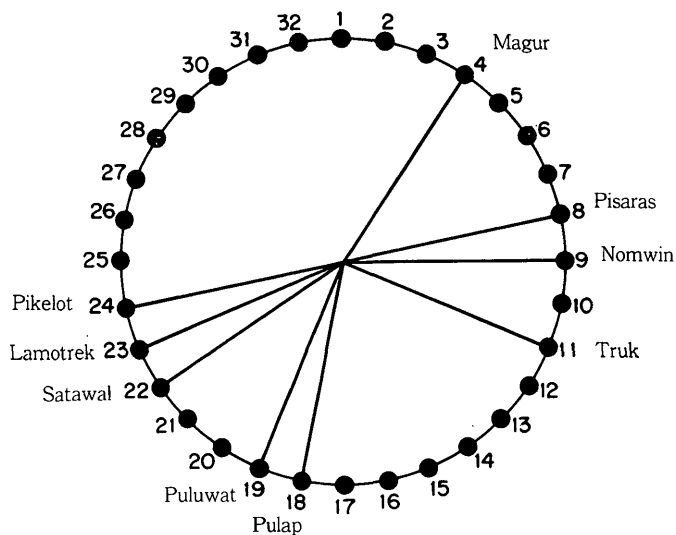


図22 ウルル島の *woofanuw* と島嶼群の方位

woofanuan Makurh (マグル島)

(図23) Ep

- 5 *Wunanu** (オナリ島)
- 9 *Ssóón* (不明の島)
- 12 *Faiyew** (イースト・フェーユ島)

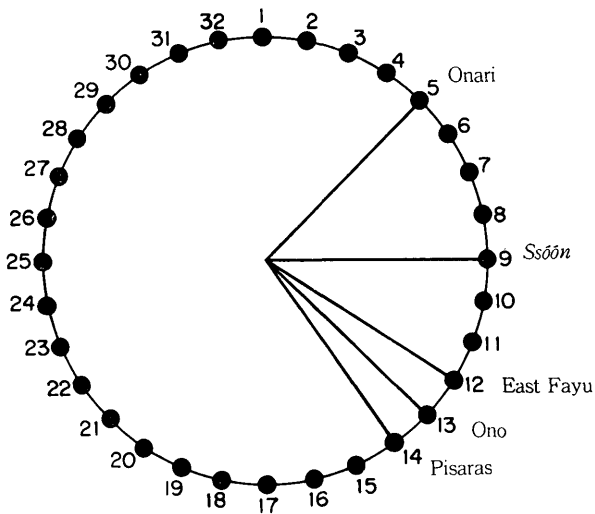


図23 マグル島の *woofanuw* と島嶼群の方位

- 13 *Wonowu** (オノ島)
- 14 *Pisirhar** (ピセラル島)

woofanuan *Pisirhar* (ピセラル島)

- (図24) Ep
- 8 *Faiyew** (イースト・ファーフ島)
 - 10 *Nómwin** (ノムイン環礁)
 - 13 *Ruuk** (トラック諸島)
 - 20 *Sowuk** (プルスク環礁)
 - 21 *Ponowat** (プルワト環礁)
 - 25 *Piik** (ピケロット環礁)
 - 26 *Wunowun** (ウルル島)
 - 30 *Makurh** (マゲル島)
 - 32 *Wunanu** (オナリ島)

woofanuan *Mwirhiné* (ムリノ環礁)

- (図25) Ep
- 11 *Tenemark** (不明の島)

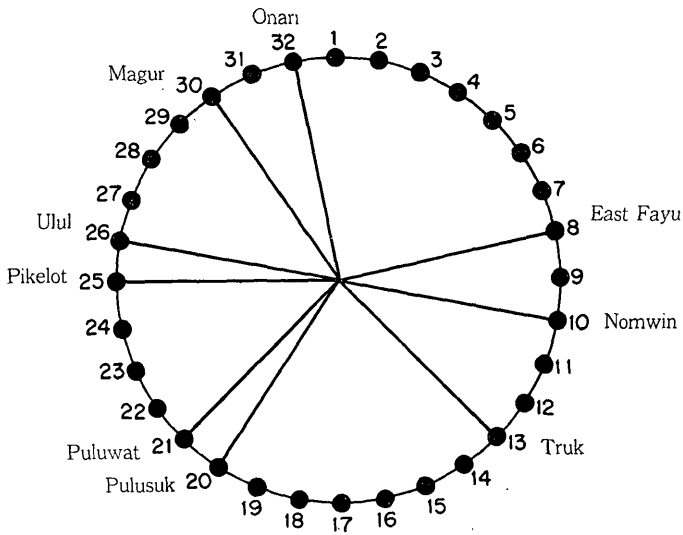


図24 ピセラル環礁の *woofanuw* と島嶼群の方位

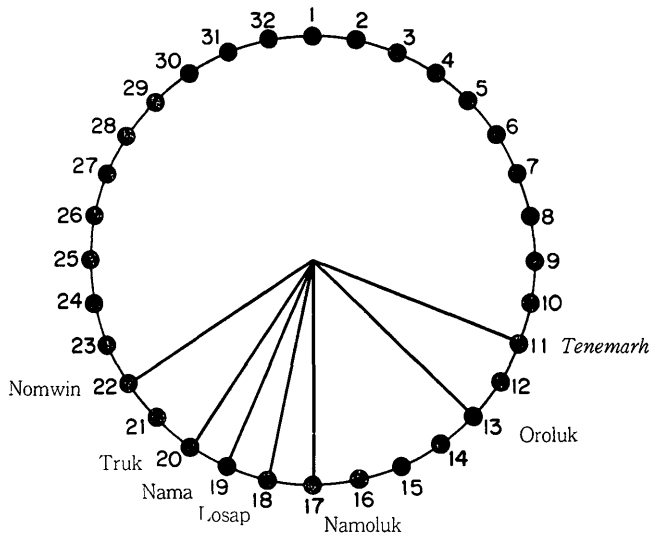


図25 ムリノ環礁の *woofanuw* と島嶼群の方位

- 13 *Worónuk** (オロルク環礁)
- 17 *Namwonuk** (ナモヌク環礁)
- 18 *Nésópw** (ロサップ環礁)
- 19 *Némé** (ネマ島)
- 20 *Ruuk** (トラック諸島)
- 22 *Nómwin** (ノムイン環礁)

woofanuan Ruuk (トラック諸島)

(図26) Ew

- 1 *Fanawanawan** (不明の島)
- 2 *Nómwin** (ノムイン環礁)
- 3 *Wunanu** (オナリ島)
- 4 *Ruwó* (リーフ)
- 5 *Téén woró yéér* (リーフ)
- 6 *Newumwun kowas* (リーフ)
- 8 *Worónuk** (オロルク環礁)
- 9 *Fónopei** (ポナペ島)
- 11 *Némé** (ネマ島)

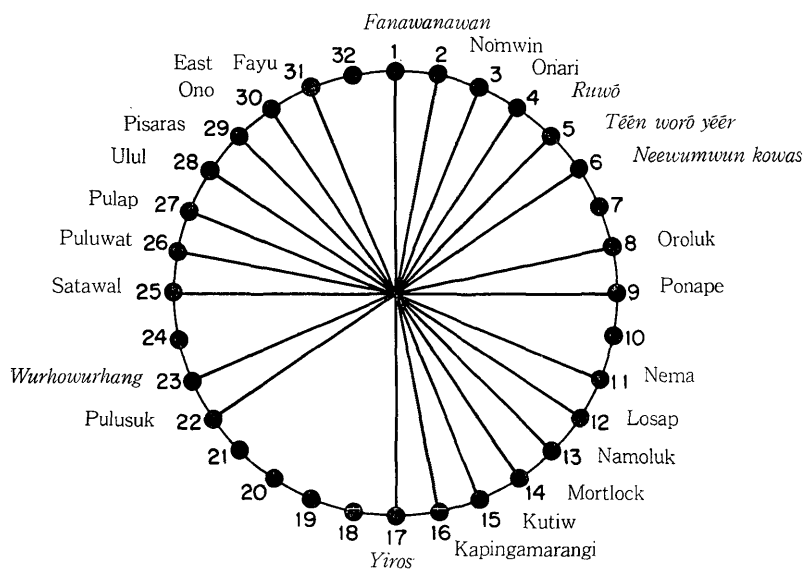


図26 トラック諸島の *woofanuw* と島嶼群の方位

- 12 *Nésópw** (ロサップ環礁)
- 13 *Namwonuk** (ナモヌク環礁)
- 14 *Mwóór** (モートロック島)
- 15 *Kutiw** (クティウ島)
- 16 *Pikiram** (カピンガマランギ環礁)
- 17 *Yiros* (架空の島)
- 22 *Sowuk** (プルスク環礁)
- 23 *Wurhowurhang* (リーフ)
- 25 *Satawal** (サタワル島)
- 26 *Ponowat** (プルワト環礁)
- 27 *Punnap** (プンナップ環礁)
- 28 *Wunowun** (ウルル島)
- 29 *Pisirhar** (ピセラル島)
- 30 *Wonowu** (オノ島)
- 31 *Faiyew** (イースト・ファージュ島)

woofanuan Nésópw (ロサップ環礁)

(図27) Ep

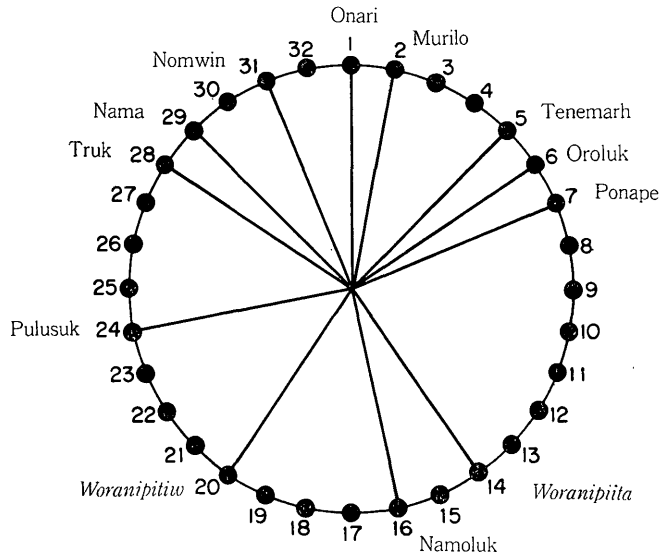


図27 ロサップ環礁の *woofanu* と島嶼群の方位

- 1 *Wunanu** (オナリ島)
- 2 *Mwirhiné** (ムリノ環礁)
- 5 *Tenemarh* (リーフ)
- 6 *Worónuk** (オロルク環礁)
- 7 *Fónopei** (ポナペ島)
- 14 *Woraniipiita* (リーフ)
- 16 *Namwonuk** (ナモヌク環礁)
- 20 *Woraniipitiw* (リーフ)
- 24 *Sowuk** (プルスク環礁)
- 28 *Ruuk** (トラック諸島)
- 29 *Némé** (ネマ島)
- 31 *Nómwin** (ノムイン環礁)

***woofanuan Namwonuk* (ナモヌク環礁)**

(図28) R

- 1 *Mwirhiné** (ムリノ環礁)
- 5 *Tenemarh* (リーフ)
- 7 *Fónopei** (ポナペ島)

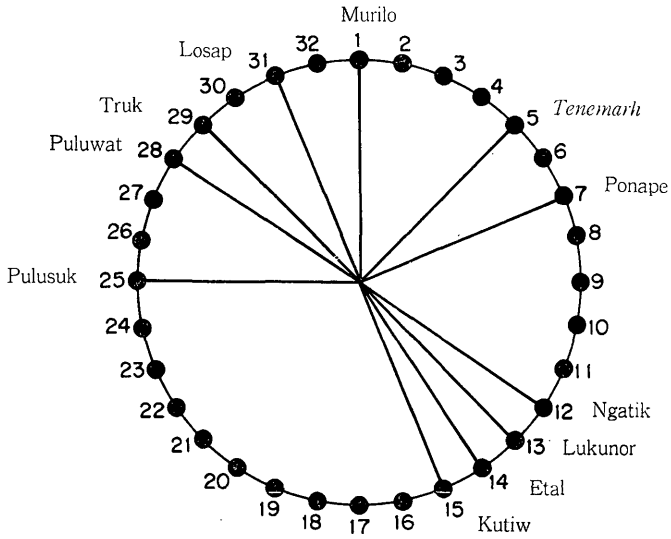


図28 ナモヌク環礁の *wofanau* と島嶼群の方位

- 12 *Yingarik** (ンガティック環礁)
- 13 *Nukunor** (ルクノール環礁)
- 14 *Yettaan** (エタール環礁)
- 15 *Kutiw** (クティウ島)
- 25 *Sowuk** (プルスク環礁)
- 28 *Ponowat** (プルワト環礁)
- 29 *Ruuk** (トラック諸島)
- 31 *Nésópw** (ロサップ環礁)

wofanuan Nukunor (ルクノール環礁)

- (図29) Ep
- 2 *Worónuk** (オロルク環礁)
 - 6 *Fónopei** (ポナペ島)
 - 9 *Yingarik** (ンガティック環礁)
 - 15 *Nukuworh** (ヌクオロ環礁)
 - 17 *Pikiram** (カピンガマランギ環礁)
 - 28 *Sowuk** (プルスク環礁)

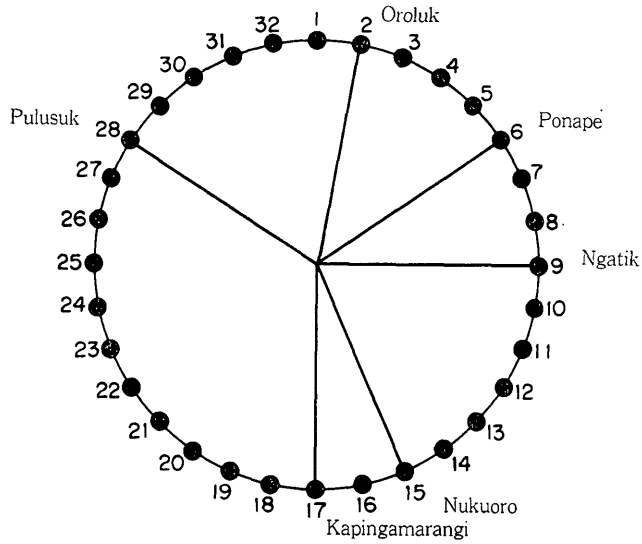


図29 ルクノール環礁の *woofanuu* と島嶼群の方位

woofanuan Worónuk (オロルク環礁)

(図30) Ik

- 4 *Woraisefang* (リーフ)
- 5 *Yerar* (リーフ)
- 6 *Ranu* (リーフ)
- 7 *Woraisipwunuw* (リーフ)
- 9 *Worainikerhikerh* (リーフ)
- 11 *Fónopei** (ポナペ島)
- 12 *Perhaina** (ペライナ島)
ンガティック環礁の1つの島。
- 13 *Yingarik** (ンガティック環礁)
- 14 *Woranipwaiyon* (リーフ)
- 15 *Woranipwor* (リーフ)
- 16 *Pworh* (リーフ)
- 17 *Nukuworh** (ヌクオロ環礁)
- 18 *Nukunor** (ルクノール環礁)
- 19 *Kutiw** (クティウ島)
- 21 *Namwonuk** (ナモスク環礁)

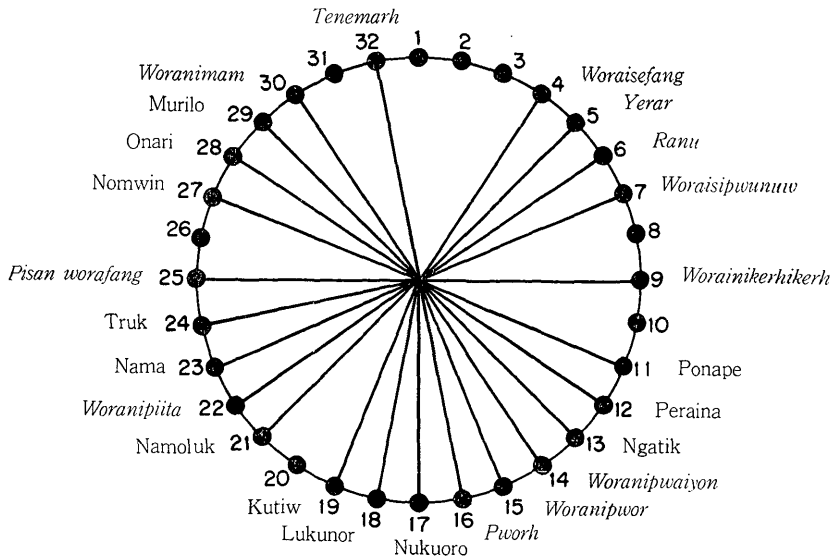


図30 オロルク環礁の woofanuw と島嶼群の方位

- 22 *Woranipiita* (リーフ)
- 23 *Némé** (ネマ島)
- 24 *Ruuk** (トラック諸島)
- 25 *Pisan worafang** (不明の島)
- 27 *Nómwin** (ノムイン環礁)
- 28 *Wunanu** (オナリ島)
- 29 *Mwirhiné** (ムリノ環礁)
- 30 *Woranimam* (リーフ)
- 32 *Tenemarh* (リーフ)

woofanuan Fónopei (ポナペ島)

- (図31) Ep
- 4 *Wuchunang** (ウジュラン環礁)
 - 5 *Rhongorhik** (ロゴリック環礁)
 - 6 *Rhongonap** (ロゴナップ環礁)
 - 9 *Raniwit** (ヤルート環礁?)
 - 11 *Mwakin** (モキール環礁)
 - 12 *Yaraw** (コシャエ島)

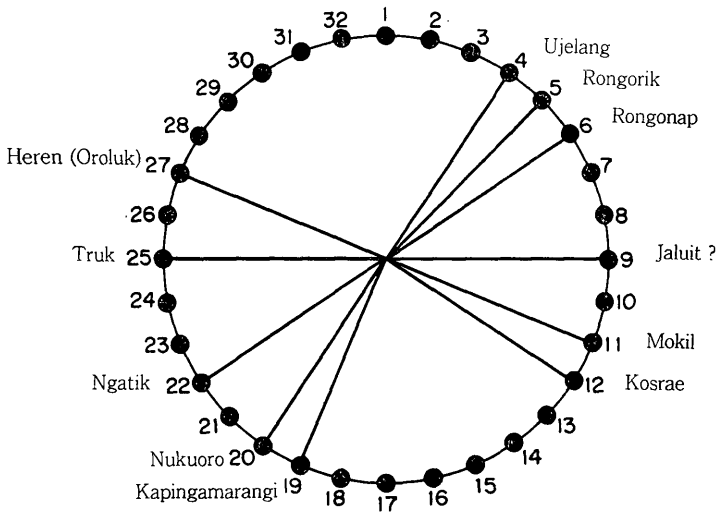


図31 ポナベ島の *woofanuw* と島嶼群の方位
(Ep の情報のみを記述。)

- 19 *Pikiram** (カピングマランギ環礁)
- 20 *Nukuworh** (ヌクオロ環礁)
- 22 *Yingarik** (ンガティック環礁)
- 25 *Ruuk** (トラック諸島)
- 27 *Heren** (オロルク環礁の1島)

R の情報では、上記の結果とすこし異なっている。

- 2 *Sówufónopei* (リーフ)
- 3 *Newumwun kowas* (砂地)
- 6 *Mwakin worarh** (島)
Pakin 環礁か?, *Nipwa maan* (1匹のトンボ)
- 9 *Mwakin pangapang** (島)
モキール環礁の1島か?
- 11 *Yaraw** (コシャエ島)
- 20 *Yingarik** (ンガティック環礁)
- 21 *Namwonuk** (ナモヌク環礁)
- 23 *Némé** (ネマ島)
- 27 *Worónuk** (オロルク環礁)

29 *Pwuroniman* (*yéré* とよばれる鳥の群)

31 *Tenemarh* (リーフ)

2. *yitimetaw* と島嶼間海域名称

yitimetaw では、原則として相異なる2つの島の間にある海の名称が言及される。以下、筆者のえた資料でもっとも西に位置するフィリピン-パラオ間の名称から順次、東のほうへと記載する。海の名称自体に関する意味はできるだけ記述した。図32には、これらの結果を番号でしめしておいた。

(1) ***Metawan yatinga***: フィリピンとパラオ、およびフィリピンとパラオの南西諸島

yatinga は、網の一種で、航海のさい漂流すると、かならず最終的にフィリピンに着く(網にかかる)ことからそのように名づけられた。なお、パラオの南西諸島には、*Songorón* (ソンソロール島)、*Katokopwei* (トビ島)、*Ppwun* (プロ・アンナ島)、*Merhierh* (メリル島) がふくまれる。

(2) ***Metaw mwáán***: パラオ諸島とヤップ島

mwáán は「男」の意味で、この海は波が荒く、男だけが航海できた。イカダ (*fefas*) で、ヤップ島の男たちがパラオにゆき、石貨をはこんだことはよく知られている。少年のころパラオにいて、白髪になってもどることもあり、困難な航海をとまなうと考えられていたようである。Damm によると、この海域は *metáue u male* と記載されている [DAMM *et al.* 1938: 174]。

(3) ***Metawan rhuwpen***: ヤップ島とウルシー環礁

pen は「軽い」の意味で、体の丈夫なものはこの海をカヌーで往復航海できたという。Damm によると、この海域は *mateuari ruepábe* とある [DAMM *et al.* 1938: 174]。

(4) ***Metaw mwarhafar***: ウルシー環礁とフェイス島

mwarhafar はミヤコテングという魚で (*Naso lituratus*)、この海は小さいが波荒く、流されてしまう。ちょうど、*mwarhafar* という魚を手でつかんでも、魚が尾をつかって暴れるさまににている。イファルク環礁では、この海域をやはり *Marevar* とよぶとある [BURROWS and SPIRO 1957: 96]。Damm によるとこの海域は *metáue mare vátje* と記載されている [DAMM *et al.* 1938: 174]。また、ヤップ島とヌグール環礁との間の海域も同じ名でよばれる。

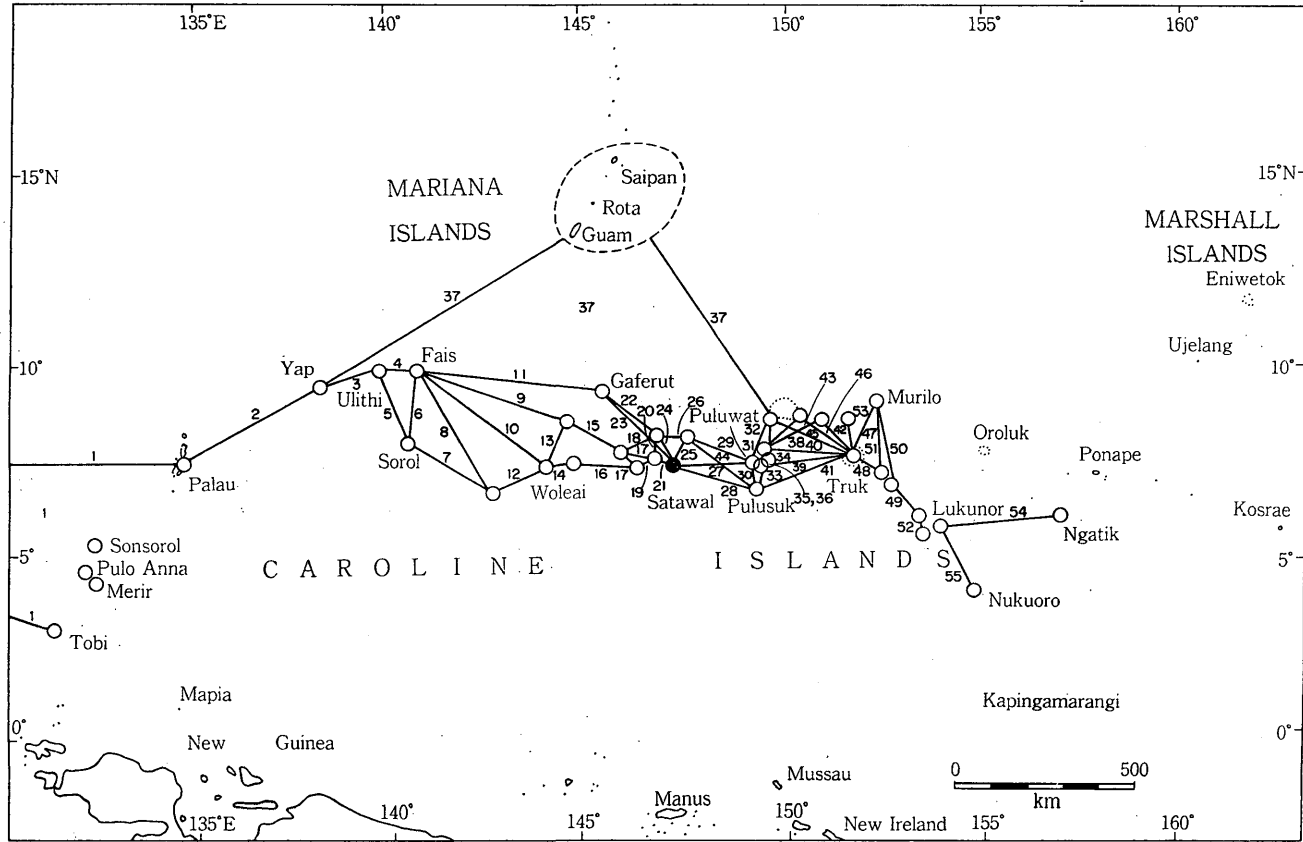


図32 カロリン諸島における海域名称

(5) **Fanimwar:** ウルシー環礁とソロール環礁
fanimwar の意味は不明。

(6) **Wanimwar:** ファイス島とソロール環礁
wanimwar の意味は不明。

(7) **Metawan kinimwar:** ソロール環礁とヨールピック環礁⁶⁾
kini は「木を拾う」の意味で、この海の航海が非常にやさしいことを航海者が誇張して表現したものだ。他の海についても同じ表現が使われることがある。

(8) **Fan mekonn:** ファイス島とヨールピック環礁
mekonn の意味は不明であるが、(9)、(10)、(11)にも *mekonn* という名称がつけられている。*fan* は「下」の意味。

(9) **Neemekonn:** ファイス島とファララップ島
nee は場所をあらわす接頭辞である。*mekonn* の意味は不明。

(10) **Yapini mekonn:** ファイス島とウォレアイ環礁
yapini は「根元」の意味で、*mekonn* の意味は不明。イファルク環礁では、この海域を *Gapilimagolo* とよぶとある [BURROWS and SPIRO 1957: 96]。Damm によるとこの海域は *kapini ma kano* と記載されている [DAMM et al. 1938: 174]。

(11) **Wón mekonn:** ファイス島とガフェルト島
wón は「上」の意味で、*mekonn* の意味は不明。しかし、以上の点から、*mekonn* をめぐって、「上」、「根元」、「下」、「～で」という場所的な区分がなされていることがわかる。

(12) **Metawanipwun:** ヨールピック環礁とウォレアイ環礁
pwun は女性が腰につける「ベルト」の意味である。イファルク環礁でもこの海域を *Metau E Libwul* とよぶとある [BURROWS and SPIRO 1957: 96]。Damm によると、この海域は *metāue ni polu* とある [DAMM et al. 1938: 174]。

(13) **Fan yikimwoturh:** ウォレアイ環礁とファララップ環礁⁷⁾
yikimwoturh は「飛ぶ魚」の意味で、この海にイルカやボラなどのよく跳躍する魚がいるためであろうか [秋道 1981c: 99]。イファルク環礁ではこの海域を *Lo Li*

6) Damm によると、*metāue ni kini mare* はウォレアイ環礁とソロール環礁とのあいだの海域をさすとある [DAMM et al. 1938: 174]。

7) Damm によると、ファララップ環礁とイファルク環礁との間の海域は *metāue panaki* とよばれるという [DAMM et al. 1938: 174]。

levang とよぶとある [BURROWS and SPIRO 1957: 96]。Damm によると *fanike matóuru* とある [DAMM *et al.* 1938: 174]。

(14) ***Fan yórhoma***: ウォレアイ環礁とイファルク環礁

yórhoma は植物の名称で学名は *Pipturus argenteus* である。イファルク環礁でもこの海域を *Valearouma* とよぶとある [BURROWS and SPIRO 1957: 96]。Damm によると *fani aroma* とある [DAMM *et al.* 1938: 174]。

(15) ***Yapini metaw***: オリマラオ環礁とファララップ環礁

yapi- は、「後」の意味である。イファルク環礁ではこの海域を *Legarax Pileirup* とよぶとある [BURROWS and SPIRO 1957: 96]。

(16) ***Yapinyurhupw***: イファルク環礁とエラート環礁⁸⁾

Yapinyurhupw は、エラート環礁のファニピー島近くにあるリーフの名前である。このリーフで魚やシャコガイをとる。

(17) ***Metawan kayussa***: オリマラオ環礁とエラート環礁、およびラモトレック環礁

kayussa の意味は不明。

(18) ***Fanekerhak***: オリマラオ環礁とウエスト・ファージュ島

fan は「下」、*kerhak* は「這う」の意味。

(19) ***Moton***: エラート環礁とラモトレック環礁

たがいに島が見える場合、その間の海は一般的に *moton* とよばれる。

(20) ***Neekerhak***: ラモトレック環礁とウエスト・ファージュ島

kerhak は「這う」の意味。

(21) ***Woirhak***: ラモトレック環礁とサタワル島⁹⁾

イファルク環礁でもこの海域を *Oirek* とよぶとある [BURROWS and SPIRO 1957: 96]。

(22) ***Núkun kerhak***: ウエスト・ファージュ島とガフェルト島

núkun は「真ん中」の意味。

8) Damm によると、イファルク環礁とラモトレック環礁とのあいだの海域は *kapinapi nipu* とされており、エラート環礁はのべられていない [DAMM *et al.* 1938: 174]。

9) Damm によると、サタワル島とエラート環礁との間の海域も、*uoi reki* ということばでよばれるという [DAMM *et al.* 1938: 174]。

- (23) **Neefas:** サタワル島とガフェルト島
neefas は島でカヌーが碇をうつ場所の名前。
- (24) **Metaw pengak:** サタワル島とウエスト・ファーフ島
pengak は「壁、ついたて」の意味。
- (25) **Metaw yu, Metawan wumwar:** サタワル島とピケロット環礁
yu は「立つ」の意味。サタワル島以西では、*Metaw yu*, プルワト環礁以東では、*Metawan wumwar* という。
- (26) **Faayu:** ウエスト・ファーフ島とピケロット環礁
faayu は「真直の」の意味。
- (27) **Yapinanei:** サタワル島とプルワト環礁
yapi- は「後」の意味、*nanei* は不明。Damm によると、この海域は *kapina nēi* とされている [DAMM *et al.* 1938: 174]。
- (28) **Fai nukase, Fan yiwān:** サタワル島とプルスク環礁
yiwan は「首」、*fan* は「下」で、*nukase* の意味は不明。*Fai nukase* はラモトレック環礁以西、*Fan yiwān* はサタワル島以東でもちいられる。
- (29) **Metawanimaan:** プルワト環礁とピケロット環礁
maan は「動物、鳥」の意味。
- (30) **Metaw pengak:** プルワト環礁とプルスク環礁
pengak は「壁、ついたて」の意味。Damm によると、この海域は *metāue pānaki* とされている [DAMM *et al.* 1938: 174]。
- (31) **Faisópw:** プルワト環礁とブンナップ環礁
fai- は *faan*, すなわち「下」、*sópw* は「先、島の先端」の意味。
- (32) **Fainurhuwai:** プルワト環礁・ブンナップ環礁とウルル島
fai- は *faan*, すなわち「下」、*nurhuwai* の意味は不明。
- (33) **Núkunyegiy:** プルスク環礁とタマタム島
núkun は「真ん中」、*yegiy* は *Pemphis acidula* という植物で、タマタム島の砂浜に多く生育している木。
- (34) **Motonnāp:** ブンナップ環礁とタマタム島
nap は「大きい」、*moton* については、(19)を参照。

(35) **Motonorhik:** プンナップ環礁とファナディック島
rhik は「小さい」で, *Motonorhik* は「小さな *moton*」の意味。

(36) **Moton:** タマタム島とファナディック島
moton については, (19)を参照。

(37) **Metawaniwón:** マリアナ諸島とヤップからウルルにいたる島じま
wón は「上」をあらわす。マリアナ諸島（グアム島, ロタ島, サイパン島）とカ
リン諸島との間に横たわる海の名称。

(38) **Nemmurhaniyáng:** イースト・フェーユ島とプンナップ環礁, およ
びプルワト環礁
mmurha- は「吹く」, *yáng* は「風」の意味。

(39) **Yarhuwan:** プルワト環礁とトラック諸島
Yarhuwan の意味は不明。Damm によるとこの海域は *eruáni* と記載されている
[DAMM *et al.* 1938: 174]。

(40) **Faasáát:** プンナップ環礁とトラック諸島
sáát は「海, 塩」の意味。 *faa* は不明。

(41) **Núkunyiwán:** プルスク環礁とトラック諸島
Yiwán はトラック諸島の大環礁の南部にある小島で, この島で多くの花をあつめて
耳かざりをつくる。

(42) **Wenupwanyora:** イースト・フェーユ島とトラック諸島
wenupw- は, 「腹から声をだして叫ぶ」という意味。

(43) **Fainumwor:** プンナップ環礁とピセラル島
fai は「下」, *numwor* は「短いヤシの木」という意味。

(44) **Fainupeí:** プルスク環礁とピケロット環礁
fai は「下」, *upeí* は「傾く」の意味。

(45) **Wenupwunón:** トラック諸島とウルル島
wenupw- は, 「腹から声をだして叫ぶ」という意味で, *nón* は「下」の意味。

(46) **Wenupwanmweir:** トラック諸島とピセラル島
wenupw- は, 「腹から声をだして叫ぶ」, *mweir* は「後」の意味。

(47) **Núkiton:** トラック諸島とノムイン環礁
níku- は「外」、*ton* はトラック諸島最大のトル島。

(48) **Fainene:** トラック諸島とネマ島
fai は「下」、*nene* の意味は不明。

(49) **Yapwong:** ロサップ環礁とナモヌク環礁
yapwong は「わかれ」の意味。

(50) **Winafar soetiw:** ロサップ環礁とムリノ環礁
winafar の意味は不明。*-tiw* は方向で「西のほう」をさす。

(51) **Winafar soota:** ネマ島とムリノ環礁
winafar の意味は不明。*-ta* は方向で「東のほう」をさす。

(52) **Metaw rhikirhik:** ナモヌク環礁とエタール環礁
rhikirhik は「小さい」の意味。

(53) **Yapirhuw:** トラック諸島とムリノ環礁
Yapirhuw の意味は不明。

(54) **Sarheyu:** ルクノール環礁とンガティック環礁
sarheyu は「真すぐのコース」の意味。

(55) **Metawan kinimwar:** ルクノール環礁とヌクオロ環礁
kinimwar については、(7)を参照のこと。

Ⅲ．考 察

本章では、*woofanuw* と *yitimetaw* という2つの知識がもっているさまざまな特徴をあきらかにしてみたい。

1. 知識の広がり

1-1. 島・サンゴ礁・架空の島

woofanuw で言及されるのは、*fanuw*、すなわち島である。この場合、対象となる島は、大きさ、火山島・隆起サンゴ礁・環礁島といった地質学的成因、人間の居住の有無といった基準で取捨選択されているのではけっしてない。しかも、*woofanuw* のな

かには、かならずしも島ばかりがふくまれているわけではない。

(イ) サンゴ礁

カロリン諸島一帯には、サンゴ礁地形が非常によく発達している。島自体が隆起サンゴ礁島や環礁島であるだけでなく、島の周囲には、海面下に没したサンゴ礁の浅瀬が分布している。サンゴ礁は一般に *woor* とよばれ、*woofanuw* のなかに数多くふくまれている。

サンゴ礁が海面下の非常に浅いところにあると、周辺で波が高く、うねりが発生する。カヌーで不用意に接近すると、座礁したり破損する恐れもある。とくに夜間の航海においてはそうした危険性はなおさら増す。そのため、とくに危険と考えられるサンゴ礁については、*woofanuw* のなかで言及される。こうしたサンゴ礁は、一般に *woor nóónó* とよばれる。*nóónó* は、「波のある」(*nóó* は「波」の意)ということをおらわしている。たとえば、*Wurhowurhan*, *Faas*, *Yesiyas*, *Fainiyas* などとよばれるサンゴ礁がそうである(第Ⅱ章の結果参照)。

ただし、*woofanuw* でのべられるすべての *woor* が航海にとって危険であるとみなされているのではない。特定のサンゴ礁の位置は、航海のさいの目安としてだけでなく、漁撈活動をおこなううえでも重要になるものと考えられる。*woofanuw* にふくまれるサンゴ礁、およびその位置を海図上で推定することはできるが、海中の地形であるだけに海図上で同定することができなかった。

(ロ) 架空の島じま

Risenberg は、プルワト環礁での調査から、*woofaluw* (サタワル島の *woofanuw*) は、「架空または想像上の存在を前提とするのではなく、イメージを一切想起しない知識である」という指摘 [RISENBERG 1976: 99-100] をおこなっている。しかしながら、*woofanuw* のなかで、架空の存在とおもわれる島じまが特定の方位に出現することがある。

たとえば、ガフェルト島(サタワル語では *Faiyew*) の *woofanuw* には、*Kafuruurh*, *Tipipi*, *Tipap*, *Fanuwan kuwen* とよばれる島々が言及されている。しかし、これらの島々はいずれも架空の島か、たとえ実在するとしても同定がきわめて困難な存在とおもわれる。プルワト環礁で調査をおこなった Risenberg も *Kafuruurh* が架空の島であると規定している [RISENBERG 1976: 115]。*Fanuwan kuwen* は「トカゲの島」という意味で島の入江の形がトカゲに似ているとか、島にトカゲが沢山いるといったように考えられている。*Tipipi* という島には、タバコが沢山あるというが、海図上にはこうした島はまったく見あたらない。*Kafuruurh* と *Fanuwan kuwen* は、*Pwuupuw-*

napanap という航海術の知識のなかでも言及されるが、実在しない架空の島である [秋道 1981b: 15-27]。

(ハ) 生物現象

島やサンゴ礁だけでなく、*woofanuw* のなかに生物現象が若干ふくまれている。たとえば、ガフェルト島の *woofanuw* には、ニシキヤッコ、アイゴ、ヒメジ、クジラがふくまれる。普通に考えれば、大洋の真ん中にサンゴ礁魚類が存在することはない。また、つねに同じ場所に魚やクジラがいるとも考えにくい。したがって、*woofanuw* のなかで言及されている生物現象は架空のものか、たとえ実在するとしても確認することが困難な存在であるとおもわれる。

じつは、*woofanuw* とは別に、ある島からみて特定の方位に出現するさまざまな生物現象を列挙した *pwukof* という知識がしられている。*pwukof* は、*woofanuw* のつぎに重要とされる知識項目であるので、これについては、別稿としてとりあげる予定である。

woofanuw は基本的に島と島との方位関係を示した知識のシステムであり、実用的な知識であるといえる。しかしそれと同時に、*woofanuw* のなかでは、実在する島やサンゴ礁だけでなく、架空の島、あるいは生物現象が言及されている点に注意を喚起しておこう。

1-2. 島の分布と *woofanuw*

1つの島の *woofanuw* には、理論的に32の相異なる島々やサンゴ礁（あるいは架空の島）がふくまれている可能性がある。あるいは、同じ方位上に、複数の島々が位置することも考えられるので、言及される島やサンゴ礁の数は32以上になるかもしれない。

しかし、第II章でしめした例からもわかるように、1つの島の *woofanuw* に実際にふくまれる島やサンゴ礁の数は、多くても27（ガフェルト島の例）である。すくない場合は、5（マグル島の例）であった。

そのわけとしてまず、所与の方位上に適当な島やサンゴ礁が存在しないという地理的制約が考えられる。つぎに、たとえ島やサンゴ礁が、ある方位に位置するとしても、非常に遠距離にあるために言及されない場合がある。たとえば、サタワル島からみて、西方にフィリピンがあり、東方には、ポナベ島がある。しかし、フィリピンもポナベ島も、サタワル島における *woofanuw* のなかではふれられていない。一方、サタワル島より西に位置するヤップ島の *woofanuw* には、フィリピンが言及されている。また、

表2 *woofanuw* における島嶼間の距離

島	最小距離 km (l)	島	最大距離 km (L)	島	L/l
Satawal	72.0	Lamotrek	556.5	Truk	7.7
Pulusuk	73.5	Puluwat	832.0	Kapingamarangi	11.3
Gaferut	115.5	Faraulep	658.0	Saipan	5.7
Truk	93.0	Nama	705.0	Ponape	7.6
Woleai	60.0	Ifaluk	549.0	Ulithi	9.2
Ifaluk	60.0	Woleai	540.0	Pulusuk	9.0
Pulap	39.8	Puluwat	507.0	Kutiw	12.7
Lamotrek	24.0	Elato	333.0	Pulusuk	13.9
Puluwat	73.5	Pulusuk	676.5	Eauripik	9.2
Pulusuk	97.5	Satawal	810.0	Saipan	8.3
West Fayu	78.0	Lamotrek	794.0	Saipan	10.2
Elato	24.0	Lamotrek	250.5	Woleai	10.4
Eauripik	120.0	Woleai	1368.0	Tobi	11.4
Oroluk	274.5	Lukunor	630.0	Pulap	2.3
Tamatam	31.5	Puluwat	1502.0	Kosrae	47.7
Ulul	69.0	Magur	381.0	Lamotrek	5.5
Sorol	229.5	Ulithi	949.5	Sonsorol	4.1
Lukunor	90.8	Namoluk	480.0	Kapingamarangi	5.3
Murilo	73.5	Nomwin	331.5	Oroluk	4.5
Ponape	151.5	Ngatik	1085.5	Rongorik	7.2
Magur	31.5	Onari	53.0	East Fayu	1.7
Namoluk	64.5	Etal, Kutiw	563.5	Ponape	8.7
Losap	21.8	Nama	600.0	Ponape	27.5
Fais	96.0	Ulithi	538.5	Gaferut	5.6
Yap	149.3	Ngulu	1256.0	Philippine	8.4
Olimarao	39.0	Elato	367.5	Puluwat	9.4

サタワル島より東に位置するトラック諸島の *woofanuw* には、ポナペ島があらわれる。このようにしてみると、1つの島の *woofanuw* のなかで言及される島じまやサンゴ礁は、ある程度、限定された空間領域にあるものと推測できる。

そこで *woofanuw* の知識のなかで言及されている島嶼間の距離を、それぞれの島についてもとめた。距離の測定にあたっては、メルカトル図法による150万分の1、200万分の1、および400万分の1の海図をもちいた。表2は、島ごとに測定した島嶼間距離の最大値（もっとも遠いところ）、最小値（もっとも近いところ）をしめたものである。これによると、ある島の *woofanuw* で、島嶼間の最小距離は、ロサップ環礁とネマ島との間における21.8 kmであった。最小距離のなかで、最大のものはオロルク環礁とルクノール環礁との間で274.5 kmあった。

他方、ある島の *woofanuw* のなかで言及される島でもっとも遠いところに位置するのはタマタム環礁とコスラエ島で、その距離は 1500 km 以上ある。ぎゃくにマグル環礁の *woofanuw* においては、もっとも遠い島がイースト・フェーユ島で、53.0 km しか離れていない。この値は、オロルク環礁の *woofanuw* でもっとも近いルクノール環礁よりも近い距離にあることになる。特定の島における *woofanuw* で、距離がもっとも遠い島にたいする距離 (L) ともっとも近い島までの距離 (l) の比 (L/l) をとると、じつに 1.7 から 47.7 と開きがある (表 2)。

1-3. *woofanuw* と *yitimetaw* の知識の広がり

筆者がサタワル島のインフォーマントよりえた *woofanuw* のなかには、カロリン諸島のほとんど主要な島じまがふくまれている。緯度からいっても、もっとも高い位置にある島はガフェルト島で、もっとも低い位置にあるのがルクノール環礁である。また、もっとも東端にある島はポナベ島で、最西端に位置するのはヤップ島である。

それぞれの島において言及される島じまは、さらに大きな領域にわたっている。もっとも西では、パラウ諸島の南西離島であるソンソロル、トビ島、さらにフィリピンがふくまれる。もっとも東は、マーシャル諸島のログリック環礁、ロゴナップ環礁、あるいはヤルト環礁である。最北に位置するのは、マリアナ諸島のサイパン島である。最も南に位置する島は、ポリネシアン・アウトライアー (Polynesian outlier) であるカピングマランギ環礁である。すなわち、カロリン諸島のほぼ中央部にあるサタワル島の航海者でさえ、カロリン諸島の全域のみならず、マリアナ諸島、マーシャル諸島までをふくむ広大な領域をしっていることになる。

yitimetaw の知識において、島嶼間の海域名称がしられている領域は、あくまで島と島との間に横たわる海である。けっしてサンゴ礁とサンゴ礁、あるいは島とサンゴ礁との間の海域が名づけられているわけではない。しかし、*yitimetaw* の知識のおよぶ領域は、*woofanuw* で言及されている領域よりも狭く、いくつかの特徴を見出すことができる。

まず第 1 は、海域名称をつけられた領域が、カロリン諸島民の航海領域を考察する場合に重要な示唆をあたえるという点である。かつてカロリン諸島では、ヤップ島

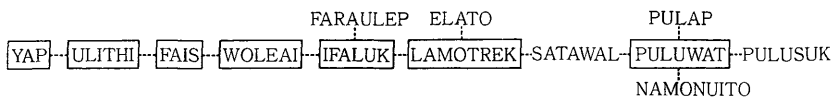


図33 ヤップ島とカロリン諸島の間におけるサウェイ (*sawai*)
 [USHIJIMA 1982] により作成。

を頂点として、サウエイとよばれる島嶼間交易がおこなわれていた [LESSA 1966; Ushijima 1982: 69-74]。その地理的な東端は、マグル、オナリ、ウルルなどの島じまをふくむナモヌイト環礁である。そのため、ナモヌイト以西の島じまにおける島嶼間の海域名称が島嶼間でよくしられていたとおもわれる(図33)。ヤップ島とカロリン諸島とは、言語的にも文化的にも異なっている [BELLWOOD 1981: 117-134] が、カロリン諸島の島じまは、基本的に同一の文化を共有する [QUACHENBUSH 1968]。そのなかでは、トラック諸島が中心的な位置を占めている。サタワル・エラート・ラモトレックの3島の間には、ラモトレック環礁を頂点とする kéé (「釣りばり」の意味)とよばれる経済的・政治的な主従関係があった [ALKIRE 1965, 1978: 120-122]。こうした島嶼間関係についてはさらに社会人類学的な考察を要するが、ヤップ島とトラック諸島との間に位置する島じまのあいだでは、島嶼間の航海を通じた密接な関係があったことは事実であり、そのことが海域名称の詳細な分布としてあらわれているとおもわれる。これにくらべて、トラック諸島以东の島嶼間における海域名称をほとんど採集することができなかった。

これにたいして、カロリン諸島とマリアナ諸島との間における海域名称は、未分化であるといってよい。現に、マリアナ諸島の個々の島じまを区別して名称がつけられているのではない。しかも、ヤップ島からウルル島にいたるいくつかの島じまとマリアナ諸島間の海域には、*Metawan wón* という名称だけがついている。かつてマリアナ諸島とのあいだで航海がおこなわれていたが、カロリン諸島の特定の島から航海がおこなわれたわけではなかったことを示唆している。しかもここ20年以内におこなわれたマリアナ方面への航海においては、プルワト環礁、サタワル島から、ウエスト・フェーユ島、オリマラオ島、ガフェルト島が中継地点(いずれも無人島)として選ばれ、その他の島は、マリアナ方面への重要なルートとみなされていなかった [LEWIS 1975; McCoy 1976]。

パラオ、およびパラオの南西離島とフィリピンとの間の海域の名称も分化していない。そして、東西に長くのびたカロリン諸島の南側の海域については、*Metawani yéer* という一般的な名称以外に、島嶼間の海域名称はしられていない。わずかに、ルクノール環礁と、ポリネシアン・アウトライアーであるヌクオロ環礁との間に名称はあるが、ポリネシア文化圏にあるカピンガマランギとヌクオロとの間の海域名称はしられていない。

このように、*yilimetaw* 自体の分布がカロリン諸島における島嶼間関係の性格をある程度あらわしているとおもわれる。ただし、えられた情報自体がカロリン諸島の中

央部に位置する島のものであるので、さらに異なった島からみて、*yitimetaw* の知識がどのような広がりをもっているかは、興味のある課題である。

2. 知識の変異

2-1. *woofanuw* の知識の変異

woofanuw の知識は、実際の航海の指針となる重要な応用的知識である。したがって、航海術の知識としてはきわめて普遍性の高い性格をもっていると考えてよいであろうか。

まず、同じ島に居住する航海者の間で、知識内容がまったく同一であるのだろうか。

サタワル島における資料によると、若干の相違点があることがわかった。たとえば、表3は、サタワル島における三人のインフォーマント (Ig, Ik, R) よりえたサタワル島の *woofanuw* である。表によると、若干の個体差がみられる。サンゴ礁について言及しているのは **Ik** だけであり、他の2人と意見の相違がみられる。他の島における比較資料がないが、こうした差異は、航海術の知識が修得されるさいにいくつもの系

表3 サタワル島における *woofanuw*—インフォーマントによる比較

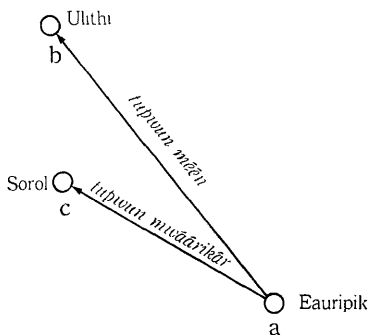
スター・コンパス上の方位番号	インフォーマント		
	Ig	Ik	R
1		<i>Yayutai nemetaw</i> †	
3		Pikelot	
4		<i>Wonipik</i> †	
5	Pikelot	Ulul	Pikelot
6	Ulul	Pulap	Ulul
7			Pulap
8	Puluwat	Puluwat	Puluwat, Truk
9	Truk	Truk	
12	Pulusuk		Pulusuk
20		<i>Wenikiy</i> †	
23			Eauripik
24		<i>Nomwonyorh</i> †	
25		<i>Mesaineyanu</i> †	Ifaluk
26	Lamotrek	Lamotrek	Lamotrek
27		Pwuuk	Olimarao
28	Olimarao	Olimarao	
30		Gaferut	Gaferut
31	West Fayu	West Fayu	West Fayu, Saipan

† はリーフまたは水路をあらわす。

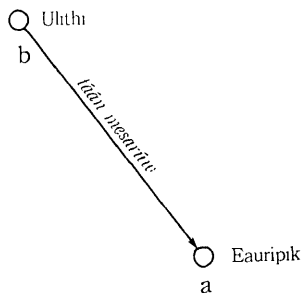
統や情報源があることを示唆している。とくに実用的な *woofanuw* の知識における情報のバラツキがあることは注目しておくべきだろう。

つぎに、相異なる2つの島嶼間の場合についてこのことを考えてみると、ある島(A)からみて別の島(B)が *láan máyínap* の方位にあったとすれば、別の島(B)からみた島(A)は、ちょうど *láan máyínap* の正反対(角度でいうと±180度)の方位をさしていなければならない。その場合の方位名称は、*tupwun máyínap* ということになる。重要なことは、スター・コンパスのモデルでは、32の方位名称をあらわす星・星座が円周上に等間隔に配列されているという点である。星や星座が円周上に等間隔に配列していたとして、円の中心を通る直線上の方位に関する2つの名称が言語情報としてうまく対応する。これがアロウムとよばれる知識に他ならない [秋道 1981a: 632-636]。しかしながら、実際の星や星座の出沈位置はモデルとはかならずしも一

(1) *woofanuan Yoorhupik*



(2) *woofanuan Yunutiw*



(3) *woofanuai Seróón*

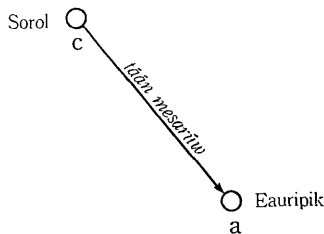


図34 *woofanuw* のシステムにおける情報のズレ

(1)では、aからみて、bとcの島は異なる方位に位置づけられているが、bとcのそれぞれの島からaをみた方位は同じである点に注意。

致しない。

事実、ある島 (A) からの別の島 (B) をみたときの方位と、(B) から (A) をみたときの方位が1つの直線にならない場合がある。たとえば、ヨールピック環礁から *tupwun méén* の方位にウルシー環礁が、*tupwun mwáarikár* の方位にソロール環礁がそれぞれ位置するというが、*woofanuai Seróón* では *táán mesarúw* の方位にヨールピック環礁が、*woofanuan Yunutiw* では *táán mesarúw* の方位にヨールピック環礁が位置するとされている。すなわち、1つの島 (a) から2つの方位上に位置づけられた島 (b), (c) があり、その2つの島から同じ方位上に (a) という島が位置づけられていること

表4 *woofanuan Fónopei* の比較

方位番号	秋 道		Risenberg [1976] による
	R	Ep	
1			Pihemweyang ^{a)}
2	<i>Sówuf ónopei</i>		Lewumunkowah ^{b)}
3	<i>Newimun kowas</i>		
4		* <i>Wuchunang</i>	
5		* <i>Rhongorhik</i>	
6	* <i>Makin worarh, Nipwa maan</i>	* <i>Rhongonap</i>	
9	* <i>Mwakin pangapang</i>	<i>Raniwit</i>	* <i>Kusaie</i> ¹⁾
11	* <i>Yaraw</i> ¹⁾	* <i>Mwakin</i>	
12		* <i>Yaraw</i> ¹⁾	
16			* <i>Ngatik</i> ²⁾
18			* <i>Nukuoro</i> ³⁾
19		* <i>Pikiram</i>	* <i>Lukunor</i>
20	* <i>Yingarik</i> ²⁾	* <i>Nukuworh</i> ³⁾	
21	* <i>Namwonuk</i> ⁴⁾		* <i>Etal</i>
22		* <i>Yingarik</i> ²⁾	* <i>Namoluk</i> ⁴⁾
23	* <i>Némé</i>		* <i>Losap</i>
25		* <i>Ruuk</i> ⁵⁾	* <i>Truk</i> ⁵⁾
27	* <i>Worónuk</i> ⁶⁾	* <i>Worónuk</i> ⁶⁾	* <i>Oroluk</i> ⁶⁾
28			Minto Reef
29	<i>Pwuroniman</i> ^{c)}		
31	<i>Tenemarh</i>		
計	12	11	12

* は実在する島をあらわす。R と Ep はサタワル島のインフォーマント。

1): コシャエ島, 2): ンガティック環礁, 3): スクオロ環礁, 4): ナモヌク環礁, 5): トラック諸島, 6): オロルク環礁をそれぞれさす。

a): 砂堆で、深い穴があり、そのなかに死んだウミガメの甲羅がつまっている。

b): 砂堆で、非常に多くの鳥が生息し、飛ぶと砂堆全体を覆うくらいの影をおとす [RISENBERG 1976: 99]。

c): *yéré* 鳥 (サギ?) の群。

になる(図34)。しかしながら、実際にはこうした例は、同一のインフォーマントの有する知識のなかではおこらず、異なったインフォーマントの間でみられる。

つぎに、異なった島々における航海者が、1つの島の *woofanuw* について、同一の知識を共有しているかどうかという問題がある。たとえば、サタワル島の航海者がもっているユルシー環礁(サタワル島より西方約 860 km にある)の *woofanuw*, すなわち *woofanuan Yunutiw* と、ウルシー環礁の航海者たちがもっている自分たちの島に

表5 ガフェルト島の *woofanuw* の比較

方位番号	Burrows and Spiro [1957] による	秋 道
1	Guam*	Guam*
2	<i>Trinial</i> (=Tinian*)	Rota*
3	Saipan*	Tinian*
4		Saipan*
5	<i>Tipipi</i>	<i>Tipipi</i>
6		<i>Tipap</i>
7	<i>Tipapa</i>	<i>Fanuan kuwen</i>
9	<i>Getūa</i>	Magur*
10	1匹のサメ ¹⁾	
11	<i>Pigela</i> (=Pikelot*)	Pikelot
12		<i>Yayuta</i>
13	<i>Satawan</i> (Satawal*)	
14	Lamotrek*	Satawal*
15	Elato*	Lamotrek*
16	1匹のサメ ²⁾	Elato*
17	Olimarao	Olimarao
18	4匹のクジラ ³⁾	<i>Faas</i> (リーフ)
19	<i>Vasulos</i> (リーフ)	Ifaluk*
20	? Ifaluk*	Woleai*
21	Faraulep*	
22		Faraulep*
23	1匹のサメと2匹の小魚 ⁴⁾	Sorol*
25	Fais*	Fais*
27	1匹の大きな魚 ⁵⁾	<i>Kafurhur</i>
28		1匹の魚 ⁶⁾
29	<i>Vasielús</i> (リーフ)	1匹の魚 ⁷⁾
30		1匹の魚 ⁸⁾
31	1人の白人 ⁹⁾	クジラの群 ¹⁰⁾
32		1匹のクジラ ¹¹⁾

1) *laigelalo*: 頭が水面上に出ている; 2) *Saumätol*; 3) *nāgemetau*; 4) *shemeijo*; 5) *tagural*: 背中が黒く、尾は白い; 6)~8), 10), 11) は, *woofanuan Faiyew* を参照のこと; 9) *gapilē*。

*は実在する島をあらわす。

表6 ヤップ島の *woofanuw* の比較

方位番号	Burroows and Spiro [1957]	秋 道
1	1 匹のクジラ ¹⁾	
3	<i>Gaverót</i>	<i>Kafurhur</i> , Guam *
4		Saipan *
4+5/2		Rota *
6	Ulithi *	
7		Ulithi *
8		Fais *
11	Sorol *	
12		Sorol *
15	<i>Tongelap</i> (リーフ)	
17	<i>Gologol</i> (リーフ)	
19		Ngulu *
21	Palau *	
22	<i>Olāt</i> (長いリーフ)	Palau *
25	Philippines *	Philippines *
29	1 匹のサメ ²⁾	
31	1 匹の魚 ³⁾ と海藻 ⁴⁾	

1) *WalimII*; 2) *úgelingaj*; 3) *söm*: 背鰭が頭のほうに曲っている; 4) *lem*。

*は実在する島をあらわす。

関する *woofanuan Yumutiw* とでは、その内容がまったく同一であるとはかぎらない。

表4は、*woofanuan Fónopei* に関して、筆者がサタワル島であつめたものと、Risenberg がプルワト環礁であつめたもの [RISENBERG 1976: 100] を比較したものである。これによると、サタワル島の2名とプルワト環礁の1名の情報が一致するのは、方位番号27のオロルク環礁の例だけである。その他は、3人のうちの2人まで方位が一致する場合（トラック諸島の例）、方位番号が3人の間でまったく異なっている場合（ンガティック環礁の例）、1人だけに言及されている場合（カピングマランギ環礁やネマ島の例）のように、一致する度合いが低い。しかし、全体としてポナベ島から言及される島やリーフの数は11~12である。同様にして、ガフェルト島とヤップ島の *woofanuw* に関する情報を比較した（表5，6）。

2-2. 方位上のズレと航海

woofanuw のなかでは、ある島からみて別の島が位置する方位は、スター・コンパスにおける32の方位名称によってきめられる。その場合、この情報を実際の航海においてもちいるさいに生じる問題点が2つある。第1は、ある方位名称のあらわすモデル上の方位と、実際の星や星座が出没する方位とのズレである。第2は、ある方位名

称をあたえられた方位に実際に目的とする島があるかどうかという問題である。もし、*woofanuw* にしめされた方位自体や、その方位によってしめされる島の位置がまちがっていたり、ズレていたら、目的の島にたどりつけないのではないかという懸念が生じる。

すでに筆者は既発表の論文において、実際の星や星座の出没方位とスター・コンパ

表7 *woofanuw* における島嶼間の方位に関する誤差

woofanuai Satawal

島	θ_o (実測値)	θ_w (<i>woofanuw</i> に おける値)	$ \theta_o - \theta_w $ (度)
Truk	091	081	010
Puluwat	091	079	012**
Pulap	084	073	011
Oror	065	065	000*
Pikelot	039	033	006
West Fayu	335	346	011
Gaferut	317	327	010
Olimarao	285	294	009
Lamotrek	281	281	000*

*: minimum error, **: maximum error

woofanuan Faiyew

島	θ_o (実測値)	θ_w (<i>woofanuw</i> に おける値)	$ \theta_o - \theta_w $ (度)
Satawal	137	127	010
Lamotrek	150	154	004
Elato	155	166	011
Olimarao	161	180	019
Ifaluk	206	206	000*
Woleai	219	233	014
Eauripik	223	243	020
Faraulep	234	252	018
Soror	257	269	012
Fais	276	279	003
Guam	350	000	010
Rota	358	014	016
Timian	002	027	025
Saipan	003	033	030**
Magur	093	081	012
Pikelot	116	091	025

*: minimum error, **: maximum error

ス上の方位との誤差に関する考察をおこない [秋道 1981a], 円周上に等分に配列されたスター・コンパスは, 知識の記憶や修得のうえで有効な認識上のモデルであることを指摘した。しかし, 実際の航海においては, モデルではなく, 星・星座を肉眼で観察できるわけであるので, モデルとコンパス方位との誤差そのものは一義的に問題とはならない。

とすれば, いま問題になるのは, コンパス方位による星・星座の出没方位と, *woofanuw* のなかでしめされた島の方位との関係である。

もし誤差があるとしたらいったいどのくらいの範囲のものであるのであろうか。この点をあきらかにするため, 島嶼間のコンパス方位に関する資料をもちいて, *woofanuw* にしめされた島嶼間の方位と比較した。島嶼間のコンパス方位に関する値 θ 。(度) は, 神戸商船大学松木教授の御示唆によった。

一方, *woofanuw* において言及されている方位名称と対応するコンパス方位を θ_w (度) とする。そして, θ_0 と θ_w との誤差 ($|\theta_0 - \theta_w|$) を筆者のあつめた資料をもとにしらべた。

表7は, そのうち, サタワル島とガフェルト島についての結果をしめしたものである。表によると, サタワル島の *woofanuw* において, 実測値と *woofanuw* に指示された方位との最小誤差は0度, 最大誤差は12度である。ガフェルト島の場合, 最小誤差は0度, 最大誤差は30度となっている。

それぞれの誤差の平均値は, 7.7度, 14.3度である。10度以内の誤差であれば, 実際の航海において目的地に到達するうえで問題がないと考えられる [松木 1980]。すなわち, *woofanuw* の知識がかなり正確なものであることが以上の点からわかる。

Ⅳ. お わ り に

サタワル島の調査資料から, カロリン諸島の航海術における *woofanuw* と *yitimetaw* という2つの知識項目をとりあげ, 島嶼間関係についての記述と考察をおこなってきた。

woofanuw と *yitimetaw* は, 島嶼間の相対的方位と海域名称を網羅した知識であり, とともにカロリン諸島の航海術における地理的な空間認識のありかたをしる貴重な資料となっている。

woofanuw の知識においては, 若干の個体差や島による情報のバラツキがみとめられた。しかし, コンパス方位とスター・コンパスによる方位との誤差がすくないこと,

10度以内の誤差であれば実際の航海においてさほど支障がないという意見を加味して考えると、*woofanuw* は遠洋航海の指針となる汎用性と有効性をもつ知識であるとみなすことができるだろう。

woofanuw のなかでは、実在する島やサンゴ礁だけでなく、あきらかに架空とおもわれる存在が言及されていた。この点から、*woofanuw* の知識が有効ではないという意見が生じるかもしれない。しかしながら、カロリン諸島の航海術においては、現実と非現実が融合した世界が展開している [秋道 1981b: 36-37]。虚と実の情報体系を、1つの島の周囲に配置するという認識のしかたがあるということ自体に注目すべきであろう。であるとしても、架空の存在でもよいなら、1つの島のあらゆる方向(32方位)に、島なり生物現象なりを位置づける工夫がどうしてなされなかったのであろうか。本論でもふれたとおり、この問題は *pwukof* とよばれる知識項目の検討によってあきらかになるとおもわれる。*pwukof* については、別稿としてとりあげる予定である。

島嶼間の方位と海域の名称だけでは、海図を描くことはできない。というのは至極、単純な話で、島嶼間の距離がまったく未知数であるからだ。カロリン諸島の航海者たちは、島嶼間の距離をいかなる方法によってしることができたのであろうか。この問題は、本論の帰結から導きだされたもう1つの重大な疑問である。じつは、島嶼間距離の認識方法について、非常にやっかいな問題がある。いくつかの知識項目を総合的に検討してみないと十分に納得のゆかないのである。この問題についても、稿をあらためてとりあげてみたいと考えている。

yitimetaw は、単に海に名前がついているというだけの知識ではない。本論では展開しなかったが、島と島との間はいくつもの領域に分割されている。この分割方法が島嶼間の距離や航海中の時間認識に重要な役割をもっている。そしてちょうど、2つの島の間にあたる、なんの名前もない「空の」領域が本論でのべてきた *metaw* なのである。すなわち、*yitimetaw* は、*woofanuw* の知識と同様に、「空の」空間にたいして特定の名称をあたえ、島嶼間の海を連続的に理解するための重要な認識手段であると考えることができる。

謝 辞

本研究のもととなった野外調査は、昭和54年度文部省科学研究費補助金(現地調査)「中央カロリン諸島における伝統的航海術の民族学的調査」の交付をうけておこなったものである。共同研究者の石森秀三、須藤健一両氏(ともに国立民族学博物館)、および国立民族学博物館共同研究「中央カロリン諸島における伝統的航海術の民族学的研究」(昭和55年度、代表石森秀三)班

員である茂在寅男氏(東海大学教授),松木哲氏(神戸商船大学教授),杉藤重信氏(甲南大学)には,共同研究会を通じて貴重な御教示をいただいた。また,本報告の一部は,国立民族学博物館共同研究「象徴・分類・認識の民族学的研究」(昭和58年度,代表松原正毅)の共同研究会において発表し,班員の方々から多くの御助言をいただいた。記して深く感謝する次第である。最後に調査助手のシャピーノ・サウチョーマン氏,およびサタワル島において航海術の知識を御教授下さった方々に厚く御礼申しあげたい。

文 献

秋道智彌

- 1980 「“風の星”と自然認識——サタワル島における民族気象学的研究」『季刊人類学』11(4): 1-51。
 1981a 「Satawal 島における伝統的航海術——その基本的知識の記述と分析」『国立民族学博物館研究報告』5(3): 617-641。
 1981b 「魚・イメージ・空間——サタワル島民の航海術における位置認識のしかたについて」『季刊人類学』12(2): 3-46。
 1981c 「“悪い魚”と“良い魚”——Satawal 島における民族魚類学」『国立民族学博物館研究報告』6(1): 66-133。

ALKIRE, William H.

- 1965 *Lamotrek Atoll and Inter-Island Socioeconomic Ties*. Illinois Studies in Anthropology 5. The University of Illinois Press.
 1970 *Systems of Measurement on Woleai Atoll*. *Anthropos* 65: 1-73.
 1978 *Coral Islanders*. AHM Publishing Co.

BELLWOOD, Peter

- 1981 *Man's Conquest of the Pacific*. Oxford University Press, pp. 117-134.

BURROWS, Edwin G. and Melford E. SPIRO

- 1957 *An Atoll Culture—Ethnography of Ifaluk in the Central Carolines*. Greenwood Press, Publishers.

DAMM, Hans *et al.*

- 1938 Ifaluk-Aurepik-Faraulip-Sorol-Mogemog. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910, II Ethnographie: B. Mikronesien Band 10, 1 Halbband*, Friederichsen, de Gruyter und Co.

GLADWIN, Thomas

1970. *East is a Big Bird—Navigation and Logic on Puluwat Atoll*. Harvard University Press.

GOODENOUGH, Ward, H.

- 1953 *Native Astronomy in the Central Carolines*. University of Pennsylvania.

石森秀三

- 1978 「マーシャル諸島民の空間認識——伝統的航海術を中心に」石毛直道編『環境と文化——人類学的考察』日本放送出版協会, pp. 175-202。

海上保安庁水路部

- 1979 『北太平洋トラック諸島至フィリピン』(400万分の1) 海上保安庁水路部。
 1980a 『北太平洋東カロリン諸島』(200万分の1) 海上保安庁水路部。
 1980b 『北太平洋西カロリン諸島』(200万分の1) 海上保安庁水路部。

国立民族学博物館(編)

- 1981 『増補改定国立民族学博物館総合案内』財団法人民族学振興会。

KRÄMER, Augustin F.

- 1906 *Hawaii, Ostmikronesien und Samoa*. Meine zweite Südseereise (1879-1899) zum Studium der Atolle und ihrer Bewohner. Stuttgart Verlag von Strecker und Schroder.

- 1932 Truk. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, II Ethnographie: B. Mikronesien Band 5, Friederichsen, de Gruyter und Co.
- 1937 Zentralkarolinen. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, II Ethnographie: B. Mikronesien Band 10, 1 Halbband: Lamotrek-Gruppe-Oleai-Feis., Friederichsen, de Gruyter und Co.
- LESSA, William A.
1966 *Ulithi: A Micronesian Design for Living*. Holt, Rinehalt and Winston.
- LEWIS David.
1975 *We, the Navigators*. The University Press of Hawaii.
- 松木 哲
1980 私信。
- 松岡静雄
1943 『南溟の秘密』養徳社。
- McCoy, Mike A.
1976 A Renaissance in Carolinian-Mariana Voyaging. In Ben R. Finney (compiled.), *Pacific Navigation and Voyaging* (Polynesian Society Memoir 39), The Polynesian Society Inc., pp. 129-143.
- MÜLLER, Wilhelm
1917 Yap. In G. Thilenius (ed.), *Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910*, II Ethnographie: B. Mikronesien Band 2, Halbband 1., Friederichsen, de Gruyter und Co.
- QUACHENBUSH, Edward M.
1968 *From Sonsorol to Truk: A Dialect Chain*. Ph. D. Dissertation, University of Michigan, University Microfilm International.
- RISENBERG, Samuel, H.
1976 The Organization of Navigational Knowledge on Puluwat. In Ben R. Finney (compiled.), *Pacific Navigation and Voyaging* (Polynesian Society Memoir 39), The Polynesian Society Inc., pp. 91-128.
- 須藤健一
1982 「カヌーと航海にまつわる民話——ミクロネシア Satawal 島の伝統的航海術の外延」『国立民族学博物館研究報告』6(4): 639-766。
- U.S. HYDROGRAPHIC DEPARTMENT
1978a *Caroline Islands—Eastern Portion*. Cornes and Co., Ltd.
1978b *Caroline Islands—Western Portion*. Cornes and Co., Ltd.
- U.S. NAVAL OCEANOGRAPHIC OFFICE
1944 *Woleai Atoll (North Pacific Ocean Caroline Islands)* No. 81237. U.S. Naval Oceanographic Office under the authority of the Secretary of the Navy, Washington D.C.
- USHIJIMA, Iwao
1982 The Control of Reefs and Lagoons: Some Aspects of the Political Structure of Ulithi Atoll. In Machiko Aoyagi (ed.), *Islanders and their Outside World* (A Report of the Cultural Anthropological Research in the Caroline Islands of Micronesia in 1980-1981), Committee for Micronesian Research, St Paul's (Rikkyo) University, pp. 35-75.
- WINKLER, Capt.
1901 On Sea Charts formerly used in the Marshall Islands with Notices on the Navigation of these Islanders in general. *Annual Report of the Smithsonian Institution*. 1899, Washington D.C., pp. 487-509.